ISSN　0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第110号

未盗掘の横穴式石室墳－京都府綾部市久田山古墳群Ｂ支群の調査－----------三好博喜 ------ 1
共同研究報告　蓋形埴輪の変遷について----------筒井崇史 ------ 7
平成21年度発掘調査略報----------17
１．仲ノ段遺跡第３次　２．天田内遺跡第２次
３．河守北遺跡第８次　４．深志野古墳群
５．長岡宮跡第473次・南垣内遺跡　６．長岡京跡右京第971次・松田遺跡
７．長岡京跡右京第974次・松田遺跡　８．女谷・荒坂横穴群
遺跡でたどる京都の歴史７　中世の京都----------27
長岡京跡調査だより・106----------36
普及啓発事業----------38
センターの動向----------41

2009年11月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

未盗掘の横穴式石室墳

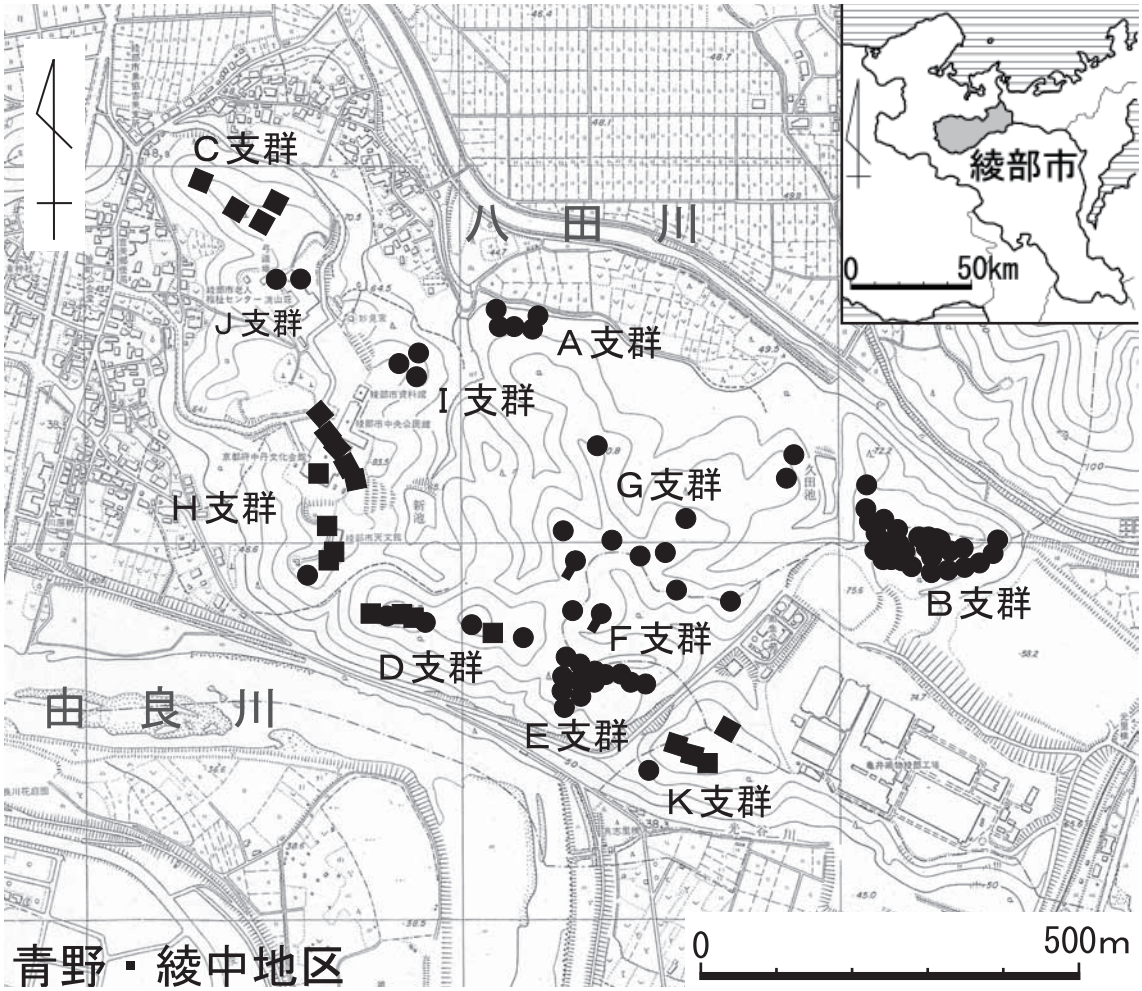
―京都府綾部市久田山古墳群Ｂ支群の調査―

三好博喜

１．はじめに

綾部市は京都府北部を流れる由良川の中流域に位置し、市内には1,000基を越す古墳が築かれている。今回報告する久田山古墳群は市の中心部に程近い綾部市里町を中心に下八田町から味方町にかけてひろがる古墳群である。群は100基程度の弥生墳墓と古墳とで構成されており、綾部市を代表する古墳群のひとつとして挙げられる。

久田山古墳群の立地する丘陵は「久田山丘陵」と呼ばれる。この丘陵は、由良川と支流の八田川とに挟まれた形で西側に向けて張り出し、丘陵からは由良川筋を極めて良好に見渡すことができる。標高90m程度のなだらかなこの丘陵には小さな谷筋が入り込んでおり、古墳群はそれぞれ尾根筋に制約されながら、小さな支群を形成している。現在ではＡ支群からＫ支群までに分けら



第１図　久田山古墳群構成図（綾部市要図１/10,000）

れ、それぞれ築造時期や立地に若干の違いがある。

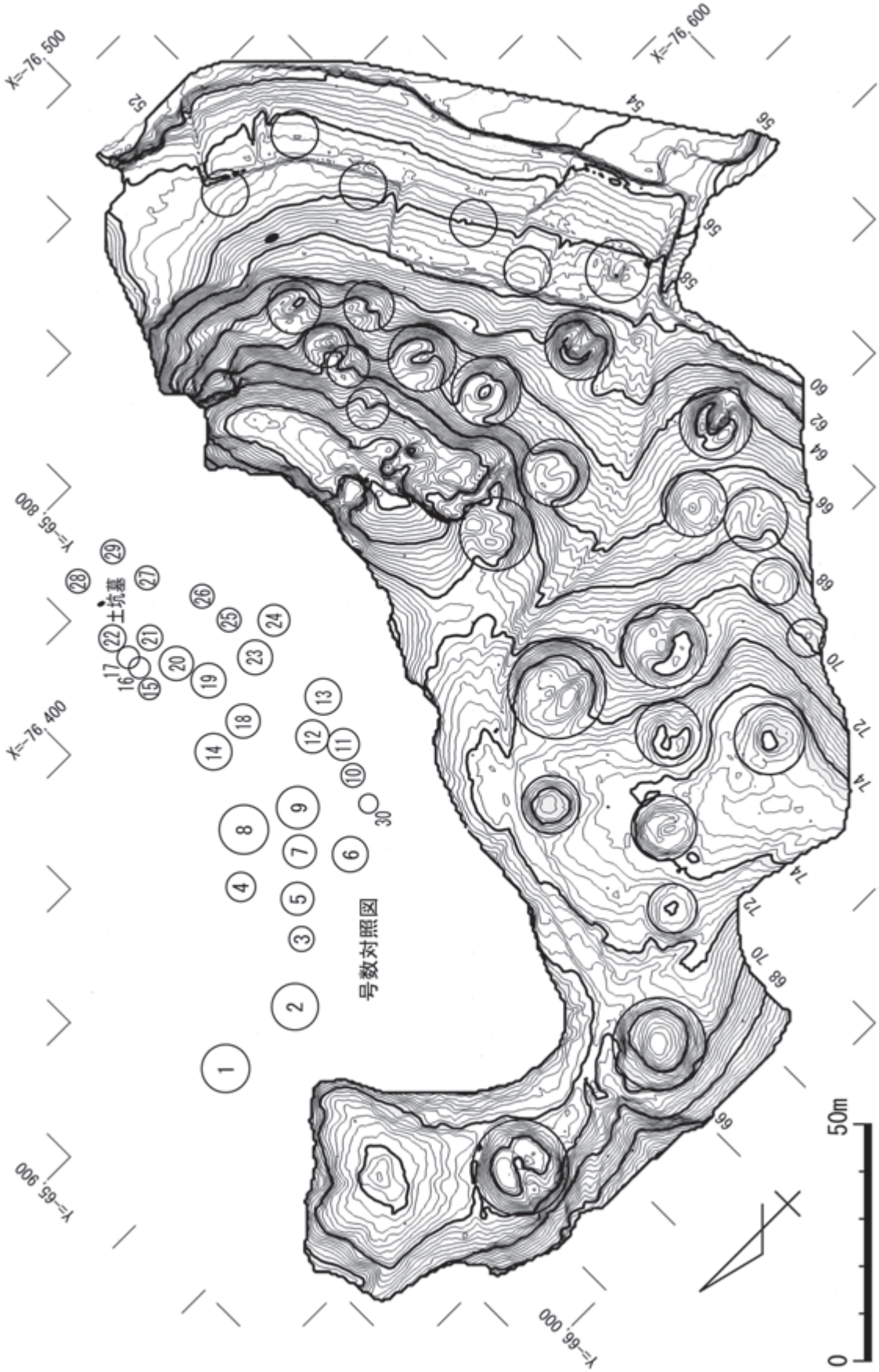
Ａ支群は丘陵の北端に位置する。円墳５基からなる支群である。墳丘は一様に高く、横穴式石室墳である可能性が高い。Ｂ支群は丘陵の北東部に位置し、30基からなる支群である。今回全域を発掘調査したことにより、木棺直葬墳３基と横穴式石室墳27基、土坑墓１基を確認した。墳丘を残すものの大半が円墳であり、１基だけが造出しをもつ。６世紀に築造され、７世紀半ばころまで利用されていた。Ｃ支群は丘陵の西北端に位置する。11基が登録されているが、明確な墳丘を有する４基はいずれも方墳で、埋葬主体部は直葬系と判断される。Ｄ支群は丘陵の南側に位置し、眼下に由良川を望む。円墳・方墳など８基からなり、短い造出しをもつ円墳を含む。Ｅ支群は丘陵の南東側に位置し、直葬系の円墳13基からなる。Ｆ支群は丘陵の中央部に位置する。２基の前方後円墳と２基の円墳からなる。久田山古墳群のなかでも卓越した存在である。Ｇ支群は丘陵の中央に位置し、９基の円墳が散在する。Ｈ支群は、丘陵の西南側に位置する。10基のうちの８基を昭和53(1978)年と平成４(1992)年とに綾部市教育委員会が発掘調査し、弥生時代後期の墳墓群であることを確認した。Ｉ支群は、Ｈ支群から北にのびる尾根の先端部に位置し、３基の円墳からなる。Ｊ支群はＨ支群とＣ支群との間に位置し、２基の円墳からなる。昭和53(1978)年に発掘調査が行われたが、主体部は確認されていない。Ｋ支群は丘陵の南東端に位置する。丘陵腹部に円墳１基、頂部に方形墳４基がある。平成14(2002)年に発掘調査を行い、円墳は古墳時代中期末、方形墳は弥生時代末期から古墳時代前期にかけてのものであることが判明した。

概観したとおり、久田山古墳群は弥生時代末期から古墳時代終末期にいたる大規模な墓域である。こうした墓域を形成した集落は、由良川の対岸にあたる青野・綾中地域にあったものと考えている。

Ｂ支群の範囲は、現在綾部市土地開発公社の所有となっており、造成を含めた有効活用が求められている。

２．久田山古墳群Ｂ支群の調査

久田山古墳群Ｂ支群については、これまで分布調査により実態把握を行ってきた。しかし、分布調査の度に７基(1975年)、18基(1983年)、22基(1998年)と古墳の数が増えているように、不明なところが多かった。そのため、古墳の位置関係や詳細な地形を正確に把握する必要があった。このため国庫補助金を受けて平成14年度から５か年にわたる範囲確認調査を行った。対象面積が２ha余りと広範囲であったことや樹木や竹林が生い茂る山中であったことから、測量調査は従来の平板測量は困難と判断し、トータルステーションで３次元座標を記録して、コンピュータ上で等高線を発生させる手法を採った。測量調査は、調査担当者・調査補助員の２名であたり、延べ89日で46,000点近いデータを採取した。また、緩斜面が広がる丘陵裾部は、かつては茶畑であったが、現状は孟宗竹が密生する荒れた竹藪と化していた。このなかにも基底石のみを残す石室墳が目視できたため、埋没した石室墳の有無を確認する必要があった。このため、電気探査・磁気探査の物理探査を実施した。探査の結果、埋没した石室墳の存在する可能性が高い箇所が数か



第２図　久田山古墳群Ｂ支群地形測量図

写真１　調査地遠景（東から）

写真２　木棺直葬墳の一例（Ｂ４号墳）

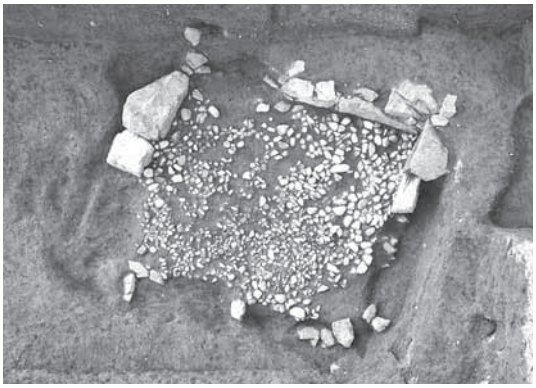


写真３　正方形の玄室（Ｂ５号墳・左が羨道部）

写真４　外護列石の一例（Ｂ12号墳）

所認められ、その後の試掘調査の結果、埋没した横穴式石室墳５基と土壙墓１基を新たに確認した。

平成19年度・20年度には全面的な発掘調査を行うこととなり、平成19年５月21日から平成21年３月31日にかけて実施した。調査の結果得られたＢ支群の主な知見は以下の通りである。

墳丘規模はほぼ３段階に分かれる。４基（Ｂ１・Ｂ２・Ｂ８・Ｂ９号墳）が直径20mを超し、Ｂ８号墳が23mで群中では最大となる。次いで13m前後が14基、10m以下が６基となる。墳丘を残すものの大半が円墳であり、Ｂ６号墳だけが造出しをもつ。

丘陵最高位は標高約74mでＢ６号墳が位置し、丘陵裾は標高約55mである。

木棺直葬墳は３基（Ｂ３・Ｂ４・Ｂ10号墳）で、27基が横穴式石室である。木棺直葬墳は横穴式石室墳と並行して築造された可能性が高い。

石室構造では、明確に玄室を設けるものは８基程度である。玄室平面形は、Ｂ５号墳が正方形に近いプランをもつほかは長方形プランである。石室規模はＢ８号墳が最も大きい（石室全長11.2m、玄室長5.1m、玄室幅2.2m）。

石室墳には墳丘裾や頂部を取り巻く外護列石や墳丘内列石をもつものが多数ある（Ｂ６・Ｂ７・Ｂ８・Ｂ９・Ｂ12・Ｂ13・Ｂ14・Ｂ18・Ｂ19・Ｂ23号墳など）。

石室に使用された石材のほとんどがチャートである。丘陵北東部にはチャートが露出する岩盤があり、石材を切り出したとも考えられる。

Ｂ支群の形成は６世紀前半に始まり、一部の石室墳では７世紀半ば過ぎまで追葬が行われる。築造は北西側の丘陵頂部附近から始まり、南東側の丘陵裾部へ向けて展開したと考えられる。

木棺直葬墳を除き、大半の石室墳は攪乱を受けていたが、Ｂ２号墳だけは人的攪乱を受けた形跡が見受けられなかった。調査中の羨道部の埋没状況を見ても後世の人の出入りは不可能であり、

未盗掘の石室と判断した。

３．久田山Ｂ２号墳の調査

Ｂ支群の横穴式石室墳のなかで、唯一後世の人的攪乱を受けていなかった石室墳である。直径約20mを測る円墳で、Ｂ支群中では最大級の規模をもつ。開口部側での高さは約４ｍあり、丘陵側でも高さ約2.5mある。墳丘北側には封土がややずり落ちた形跡が認められた。石室内でも当該箇所で石材が脱落しており、自然崩落もしくは石室自体の歪みから起きた事象と思われる。石室進入口は、谷側に向いた西側にある。測量図には筋状に窪んだ若干の地形変化に現れるだけで、完全に閉ざされていた。羨道部の調査を進める中で石材の多くが崩落し、天井石も大きく傾いていることがわかった。側壁石材の石質が天井石の重量に比べて貧弱で、圧迫され破砕した可能性が高い。こうした状況のなかで羨道部は閉塞石と合わせて完全に密封されたものと思われる。密封された時期は特定できないが、少なくとも玄室内は埋葬直後の状態を留めていると感じられた。

写真５　Ｂ２号墳（玄室奥から）

写真６　Ｂ２号墳出土高杯形器台

石室は全長9.8m、玄室規模は長さ4.5m・幅2.3m、天井高約３ｍである。玄室平面形は両袖形態を採るが、左袖（奥壁を背にして：以下同じ）の出はやや小さい。玄門部に敷居石を１石置き、玄室床面には拳大の川原石を約30cmの厚さで敷き詰めている。側壁は５段から７段に割り石を積み上げている。床面から1.5m附近まではほぼ垂直に立ち上がり、そこから大きく内傾させ、持ち送っている。石材はチャートである。玄室には天井石４枚、羨道部には天井石３枚を架ける。玄室床面は側壁石材が数石崩落していたが、土砂の流入は少なく、覆土は20cm程度であった。

出土遺物には人骨・鏡・馬具（轡・辻金具・帯金具）・鉄製品・玉類・貝殻・土器などがある。人骨片には頭蓋骨の一部や四肢骨などがあり、石室左側の奥壁寄りから出土した。同じ位置からの青銅製の小型鏡が出土している。馬具は石室右側の奥壁寄りから出土した。轡・辻金具・帯金具などがあり、鏡板や辻金具には鍍金が施されている。付近から放射肋をもつイタヤガイ科二枚貝の左殻の一部が出土した。用途はわからない。鉄製品では直刀４点と短刀２点が玄室中央付近、人骨両側から出土した。斧２点と鎌１点は奥壁寄りから出土している。玉類は玄室右側前寄りを中心に管玉・切子玉・臼玉・ガラス小玉などが出土した。他の石室で数多くみられた耳環は出て

いない。土器類は杯・高杯がほとんどを占める。杯は蓋・身合わせて50点余りある。型式は陶邑編年ＴＫ10古段階から新段階前後に併行する時期に限定される可能性が高い。高杯は須恵器・土師器合わせて20点ほどある。土器類の出土は玄室両袖部の隅からが多く、特に高杯はほとんどが右袖部隅から出土した。一方甕や壺・瓶などは極めて少なく、石室内外出土分を合わせても土師器の甕・壺・長頸壺、須恵器の大甕や提瓶２点などがあるだけである。

特異な出土遺物に須恵器の高杯形器台がある。器高約53cm、口縁部径約33cm、裾部径約26cmを測る。脚部には三角形の透かし孔を４段設け、上部２段は３方向、下部２段は４方向に開けている。破砕されたためか小片で出土したが、その散らばり方には特徴がある。杯部は玄室内から出土し、脚部は前庭部から出土した。何らかの意図をもって破砕投棄された可能性がある。

Ｂ２号墳では人的攪乱が及んでいなかったことから、埋葬当時の状態を調査できたと認識している。

４．おわりに

久田山古墳群Ｂ支群については今後整理作業の進展とともに多くのことが明らかとなろう。

久田山古墳群を造営した集落は、青野・綾中地区にあると推測している。この地域には弥生時代から続く大規模な集落が立地する。律令期には何鹿（いかるが）郡衙や綾中（あやなか）廃寺といった施設が置かれ発展をみせ、現代に至っては綾部市街地を形成する。この意味において、久田山古墳群は、「綾部の原点」・「綾部の心」とも言うべき遺跡なのである。

（みよし・ひろき＝綾部市教育委員会総主任）

久田山古墳群関係文献

京都府教育委員会「綾部市以久田野丘陵遺跡分布調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1975）1975

綾部市教育委員会「久田山－京都府綾部市久田山遺跡・久田山南遺跡発掘調査報告書－」（『綾部市文化財調査報告』第５集）1979

山城考古学研究会『丹波の古墳Ⅰ－由良川流域の古墳－』1983

中村孝行「綾部市久田山南遺跡の出土遺物について」（『太邇波考古』第５号　両丹技師の会）1985

綾部市教育委員会『綾部市遺跡地図』1998

綾部市教育委員会「久田山Ｈ２号墳」（『綾部市文化財調査報告』第19集）1993

綾部市教育委員会「久田山古墳群Ｂ支群確認調査概報」（『綾部市文化財調査報告』第33集）2003

綾部市教育委員会「久田山古墳群Ｋ支群発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告』第33集）2003

綾部市教育委員会『綾部市文化財調査報告』第34集　2004

岩井顕彦「京都府綾部市里町久田山古墳群Ｈ支群出土鉄器の再検討」（『太邇波考古』第22号　両丹考古学研究会）2005

綾部市教育委員会『綾部市文化財調査報告』第35集　2005

綾部市教育委員会『綾部市文化財調査報告』第36集　2006

綾部市教育委員会『綾部市文化財調査報告』第39集　2007

共同研究報告

蓋形埴輪の変遷について

筒井崇史

1．はじめに

蓋形埴輪は、古墳に樹立された器財埴輪の中でも、普遍的に出土するものの１つである。これまでの研究成果によれば、その出現は古墳時代前期後半で、後期中頃まで存続すると考えられる。

ところで近年の古墳研究では、古墳の築造年代について、須恵器の年代観を積極的に評価して、細かな所まで議論されることが多い。これに伴って、円筒埴輪や器財埴輪にも具体的な年代観を与えようとする傾向がみられる。これはあくまでも、古墳、特に大王墓クラスの大型前方後円墳の年代観の検討作業の一環で、多くの成果が得られている。

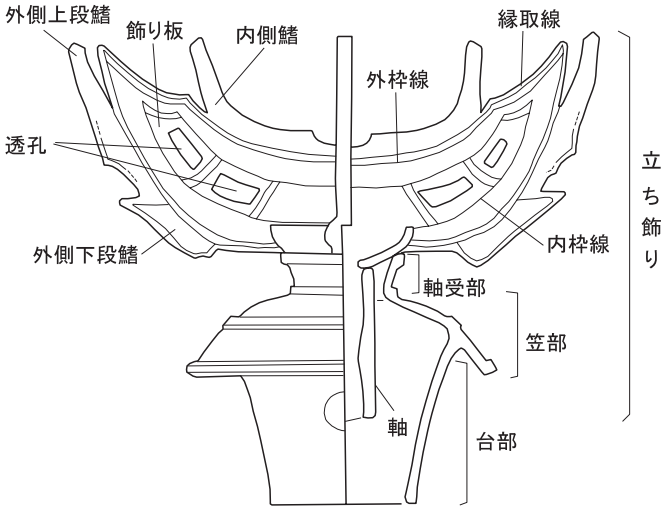
本稿では、こうした近年の古墳年代研究の成果も踏まえつつ、蓋形埴輪を対象として、その変遷について検討をおこなうものである。検討を加える蓋形埴輪は、おもに畿内地域で出土した資料を対象とする。また、蓋形埴輪の各部の名称を第１図に示した。

なお、本稿は、平成17・18年度に実施した共同研究「器財埴輪の変遷と地域性」の成果によるものである。

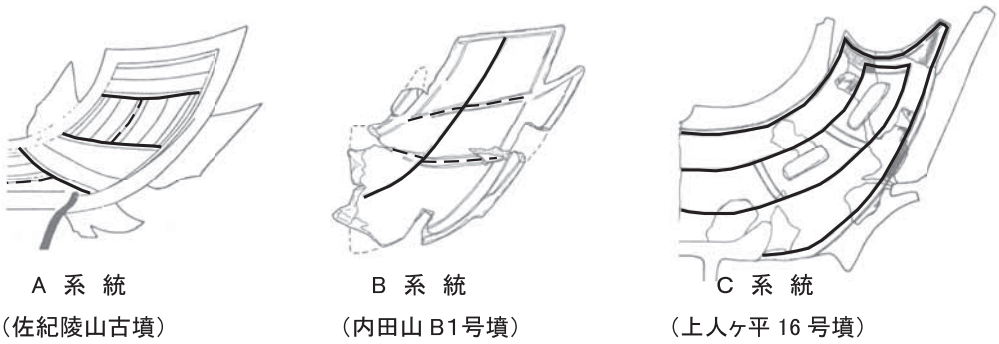
2．検討の視点－立ち飾りの分類－

本稿で、蓋形埴輪を検討の対象として取り上げるのは、資料数が比較的豊富であること、先行研究が多いこと、などによる。特に先行研究は他の器財埴輪とくらべても多い。残念ながら、ここではその詳細に触れる余裕はないが、本稿でも多くの成果を参照していることを付記しておきたい。

さて、蓋形埴輪の編年的研究は、田中秀和・高橋克壽・松木武彦・川村和子の各氏がおもに笠部の変化に着目した分類と変遷の検討を行っている。[注1] 一方、伊賀高弘・櫻井久之両氏は立ち飾りの形態や文様の変化に注目した検討を行っている。また、



第１図　蓋形埴輪各部名称図
（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第 51 集
52 頁掲載図を再トレース、一部改変）



第２図　文様分類図（縮尺不同）

松木氏や川村氏が笠部と立ち飾りの総合的な検討を加えられており、一定の成果を収めている。とは言うものの、全般的に笠部の分類・変遷が主体的であることは否めず、筆者は立ち飾りの形態や文様の型式学的な変化については十分な検討が行われていないと感じている。これは立ち飾りの文様や形態が多様で、変化の指標が見いだしにくいためと思われる。

そこで、立ち飾りを構成する属性のうち、①文様、②鰭、③飾り板の３つの属性に着目して分類を行い、立ち飾り全体の分類を考えることにしたい。

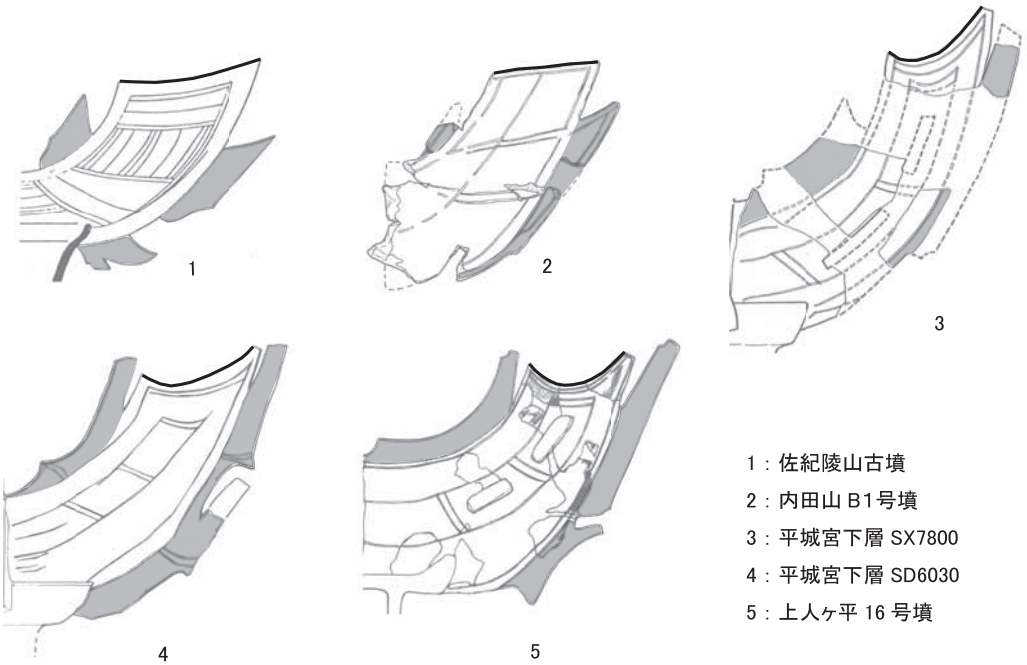
①文様の分類　飾り板に施される文様には複数のものが認められる。本稿ではこれら文様の違いを「系統」と呼んで分類する。代表的な文様を以下の３つに分類するが、この分類に属さない文様の例も多数ある。なお、各系統における文様は、基本的には「文様の退化」という視点で、型式的な変化を追うことができるので、これによって各資料の時間的変遷を明らかにすることができる。

Ａ系統　飾り板の文様が「五線帯」を基本とし、これを横位（１単位）、縦位（２単位）、横位（１単位）、縦位（１単位）と交互に配列して構成されるもので、都合４段の文様帯となる（第２図左）。この文様では、まず横位による分割があって、その中に縦位の文様が配置されていることから、横位の分割に優位性が認められる。奈良県佐紀陵山古墳や京都府瓦谷１号墳などで代表的な出土例がある。

Ｂ系統　飾り板の中央を縦線によって左右に分割し、それぞれを複線で横位に分割しているものである（第２図中）。この文様では縦位の分割に優位性が認められる。奈良県乙女山古墳や京都府内田山Ｂ１号墳などで代表的な出土例がある。

Ｃ系統　これらとは異なる文様をもつものとして、飾り板本体の周囲を縁取り、その内側に相似形の枠を設け、その内部を横位の複線で分割する文様を採用するものがある（第２図右）。これらは、Ａ系統における横位分割や、Ｂ系統における縦位分割という文様分割の基本形がみられない一群である。なお、Ｃ系統には長方形の透孔をもつものともたないものがある。奈良県平城宮下層や京都府上人ヶ平５・14・16号墳などで代表的な出土例がある。

②鰭の発達　飾り板の内側と外側に小さく取り付けられる鰭が、時間の経過とともに飾り板を上回るほどに長大化していくことが先行研究によって明らかにされている。第３図１はＡ系統の飾



第３図　鰭・飾り板分類図（縮尺不同）

り板であるが、両側に小さく鰭が付くに過ぎない。また、一般的に外側の鰭は２個と考えられているが、実際に外側の鰭が２個付く例は少ない。佐紀陵山古墳の例もあくまでも復原であって確実な出土資料はない。Ａ系統で外側下段鰭を確実に確認できるのは、畿内地域以外の資料となるが、三重県石山古墳や岡山県金蔵山古墳などの出土例がある[注2]。第３図２・３はＢ・Ｃ系統の立ち飾りである。鰭が１にくらべて長大化しているが、まだ飾り板を上回るほどではない。また、外側の鰭は１個のみで、この点からも外側の鰭が２個付く例は主体的でないと判断したい。第３図４・５はＣ系統の立ち飾りで、鰭が飾り板を上回るほど長大化した例である。この段階で、外側の鰭が確実に上下２個あることが確認できる。なお、４は外側の鰭を上下に分ける切れ込みが５にくらべて強く、古い様相のようにみえる。

③飾り板の形態的変化　飾り板本体の形態の変化に着目すると、第３図１・２では飾り板の上縁辺がおおむね直線を呈するが､第３図３～５では上縁辺が大きく弧状を呈するようになる。また、１にくらべると、２～５は飾り板の長さに対する幅が狭くなり、細長い印象を与える。

３．立ち飾りの変遷について

次に上記で行った立ち飾りの属性分類にもとづいて、各系統ごとに立ち飾りの変遷についてみていくことにしたい。

①Ａ系統　奈良県佐紀陵山（伝日葉酢媛陵）古墳、京都府瓦谷１号墳、同内田山Ｂ１号墳、同庵寺山古墳、大阪府津堂城山古墳、同一ヶ塚古墳、同長原 40 号墳などから出土した資料がある（第４図１～７）。

このうち、佐紀陵山古墳出土例は、文様の構成などから、すでに先行研究によって出現期のも

のであることが明らかにされている。また、瓦谷１号墳出土例も同様の文様に復原することができる（Ａ１群）。次に、横位の単位が著しく狭くなり、わずかに横帯として認められるにすぎなくなる長原40号墳の例がある（Ａ２群）。これに引き続くのが、Ａ２群における横帯が欠落し、もともと五線帯が縦位に配列されていた部分のみが表現された津堂城山古墳や一ヶ塚古墳、内田山Ｂ１号墳などの出土例である（Ａ３群）。これらでは横位の分割単位に、縦位の分割線を施すが、場所によっては分割線のない例や分割の幅が異なる例など、規則性の一貫しないものが多数みられる。このＡ３群の縦位の分割線が欠落したものとして、庵寺山古墳出土例などがある（Ａ４群）。

以上のようにＡ系統は、Ａ１群→Ａ２群→Ａ３群→Ａ４群という変遷をたどったと考える。このような文様の変化に対して、鰭や飾り板そのものに大きな変化は認められない。

Ａ系統の時期については、上記の各古墳において、良好な土器資料に恵まれていないため、円筒埴輪でみると、川西編年のⅡ～Ⅲ期に位置づけられる。[注3] また、須恵器が共伴する例も知られていない。したがって、古墳時代前期後半から中期前半におさまると考える。ただ、上記の変遷でいえば、各群の時間幅やどの程度重複関係にあるのかなどは明らかにはしがたい。

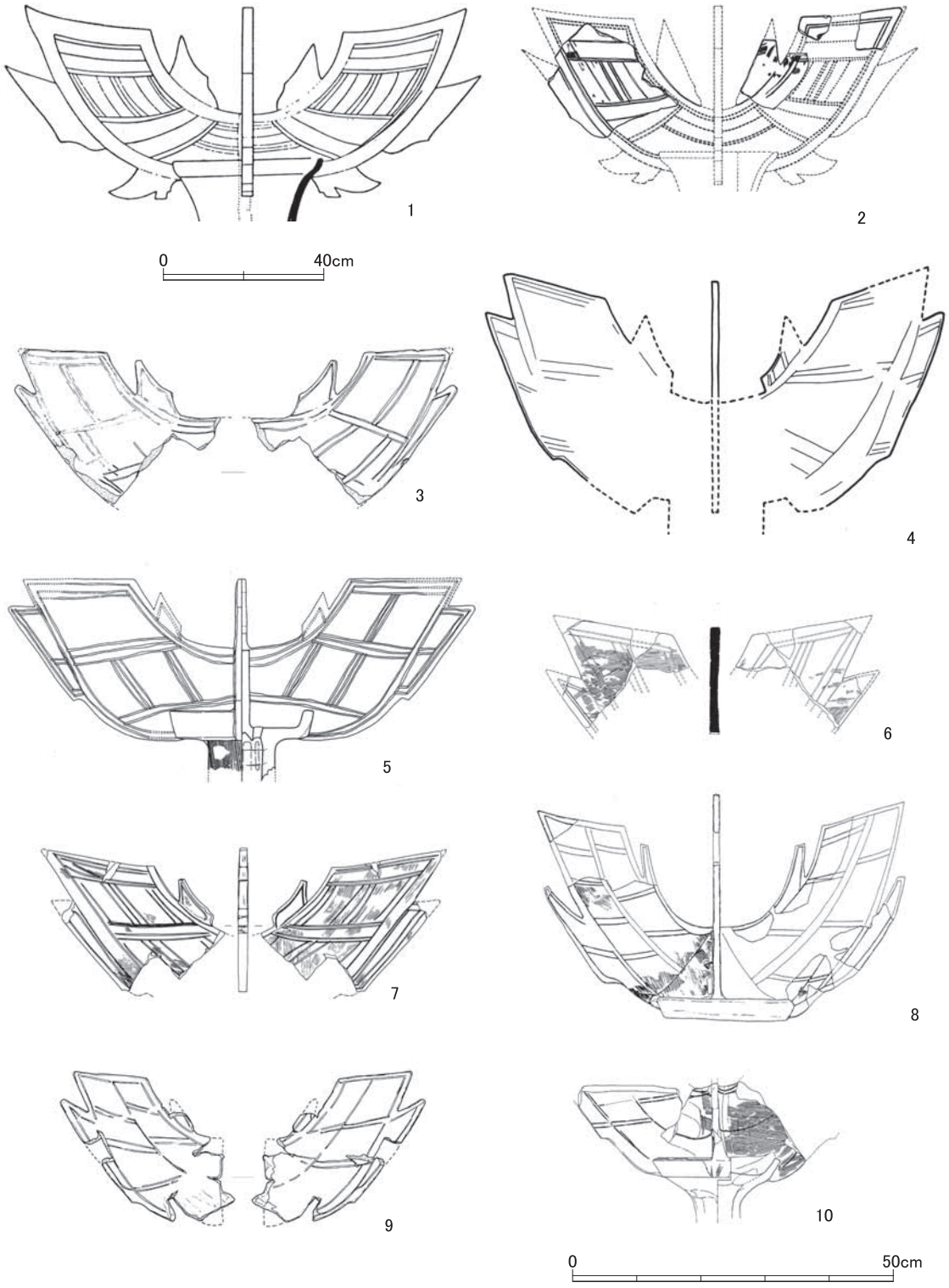
②Ｂ系統　奈良県乙女山古墳、京都府内田山Ｂ１号墳、大阪府野中宮山古墳から出土した資料などがある（第４図８～10）。乙女山古墳の例は縦位の分割線を複線で表現している点で、ほかの２例とは異なるが、鰭の程度や個数、分割の方法などはよく類似している。ただし、類例が少ないため、変遷等の詳細な検討は困難である。

Ｂ系統の時期についても、良好な土器資料がない。円筒埴輪では川西編年のⅢ期に位置づけられる。また、内田山Ｂ１号墳ではＡ系統の第４図３が主体部で、Ｂ系統の第４図９が周溝で出土しており、両者が近接した時間帯に存在したことを示している。全体としては古墳時代中期前半に位置づけられると考える。

③Ｃ系統　奈良県平塚１号墳、同平城宮下層ＳＤ6030、同平城宮下層ＳＸ7800、京都府上人ヶ平５・14・16号墳、同芭蕉塚古墳、大阪府野中古墳、同黒姫山古墳などから出土した資料がある（第５図１～９）。Ｃ系統の資料は、数量も豊富で、全体の形状がわかるものも多く、Ａ・Ｂ系統にくらべるとより詳細な検討を行うことが可能である。

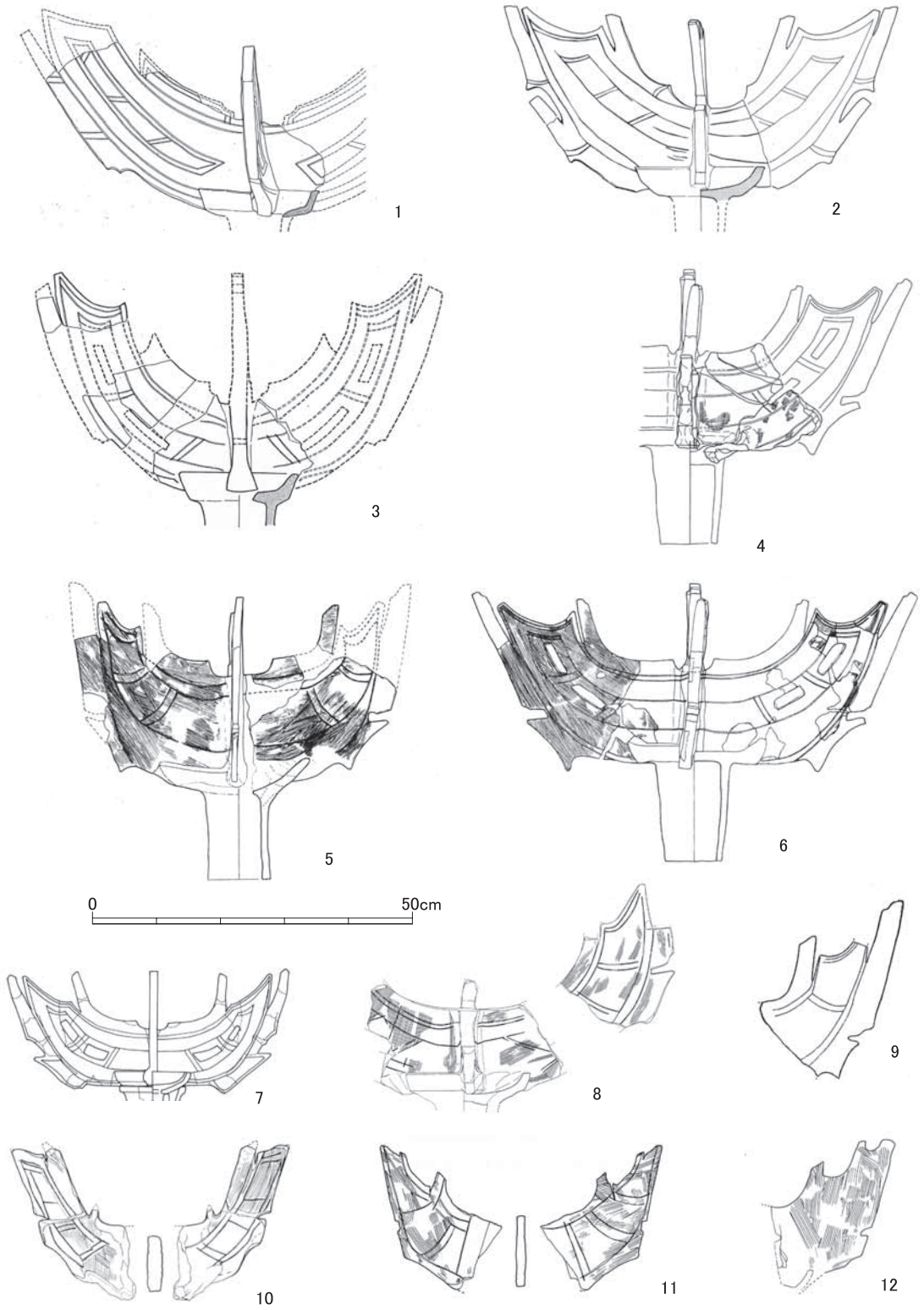
Ｃ系統で最も古い特徴を持つものとして、平塚１号墳や平城宮下層ＳＸ7800の出土例がある。これらは、鰭の発達度が弱く、飾り板の上辺よりも上方へは突出しない。また、外側につく鰭が１個しか見られないものがある。なお、ＳＸ7800では飾り板が大きく「U」字形を呈し、外側の鰭が２個に復原されているものがある。外側の鰭が２個となる最も古い個体かもしれないが、復原部分が多く詳細は不明である。[注4] 一方、長方形の透孔が確認できるものがある。以上のような特徴から、これらの資料がＣ系統の出現期のものと考えている（Ｃ１群）。

これらに続く資料として、平城宮下層大溝ＳＤ6030、芭蕉塚古墳、上人ヶ平５・16号墳、野中古墳などの出土例がある。これらは飾り板の上辺が「U」字形に弧を描き、内外の鰭がこの上辺よりも突出する。外側鰭は確実に上下２個となる。文様も各資料の間で共通性が高く、定型化した感が強い。なお、飾り板の内部に長方形の透孔をもつものともたないものがある。これらの資



1：佐紀陵山古墳（復原図）　2：瓦谷1号墳（復原図）　3：内田山 B1号墳（主体部出土）
4：庵寺山古墳　5：津堂城山古墳　6：一ヶ塚古墳　7：長原 40 号墳
8：乙女山古墳　9：内田山 B1号墳（周溝出土）　10：野中宮山古墳
（1・2のみ Scale=1/16、そのほかは Scale=1/10）

第４図　蓋形埴輪立ち飾り実測図（１）



1：平塚1号墳　2：平城宮下層SD6030　3：平城宮下層SX7800　4：上人ヶ平5号墳（復原図）
5：上人ヶ平 14 号墳　6：上人ヶ平 16 号墳　7：芭蕉塚古墳（復原図）　8：野中古墳
9：黒姫山古墳　10：上人ヶ平9号墳　11・12：弓田遺跡SD95062
（7のみ縮尺任意、そのほかは Scale=1/10）

第５図　蓋形埴輪立ち飾り実測図（２）

料は、形態や文様に共通性が高く、少なくとも畿内では一定の広がりをもっていることから、基本的な範型が存在し、それらを共有していた可能性もあると考えている。以上のような点から、筆者はこれをＣ系統の典型的な資料と考えている（Ｃ２群）。

以上の典型的な資料群にわずかに後出する可能性のあるものとして、上人ヶ平14号墳、野中古墳、黒姫山古墳などの出土例がある。これらは、Ｃ２群の資料とくらべると、文様の内側の枠線がなく、横位の複線が外側の縁取り線に直接つながる。鰭や飾り板の特徴は大きく異ならないが、長方形透孔の例は少ないようである（Ｃ３群）。このＣ３群とＣ２群の間にどの程度の時間差があるのか明らかでない。むしろほとんど同じ時間帯に存在している可能性の方が高い。

次にＣ２・Ｃ３群に後出する資料がある。Ｃ２・Ｃ３群にくらべると、形態的な変化が大きく、型式的な断絶さえ感じる。ただ、型式的な隔たりがあるとしても、Ｃ３群からの型式学的変化で説明できるものなので、Ｃ系統の立ち飾りと判断した。このような資料として上人ヶ平９号墳出土例がある（第５図10）。本例は、Ｃ３群にくらべると、外側の上段の鰭が飾り板と一体化し、事実上、失われている。しかし、飾り板の外側中位に切れ込みを入れて下段の鰭をかろうじて意識している。内側の鰭は従来と同様、飾り板を上回る長大さを残す一方、小さな突起状のものがみられる。また、飾り板にはＣ３群からわずかに退化した文様を描いている（Ｃ４群）。

さらにこれに引き続くと考えられるのが、上人ヶ平９号墳からわずか600mほど北西で検出された弓田遺跡の溝ＳＤ95062出土例である（第５図11・12）。本例はＣ４群の飾り板と内側鰭がわずかな切れ込みによって区別される程度に一体化するとともに、Ｃ４群の立ち飾りの内側にみられた突起状のものが新たに鰭状の突起として前型式より大型化する。文様はＣ３群→Ｃ４群の流れを受けるものである。また、文様を施さない無文のものもみられる（Ｃ５群）。

以上のようにＣ系統は、Ｃ１群→Ｃ２群→Ｃ３群→Ｃ４群→Ｃ５群という変遷をたどったと考える。ただ、上述のように、Ｃ３群とＣ４群との間には型式的な断絶が存在した可能性があり、後述するように共伴する出土土器にも須恵器の型式の上では欠落があるようである。したがって、今後、新出資料によって、型式組列の充実を図る必要がある。

Ｃ系統の時期については、円筒埴輪やほかの形象埴輪と共伴することも多いが、須恵器や土師器などの土器資料の共伴例が充実している。まず、出土須恵器の型式が明らかな古墳・遺構としては次のようなものがある。野中古墳ではＴＧ232～ＴＫ73型式、芭蕉塚古墳ではＴＫ73～ＴＫ216型式、平城宮下層ＳＤ6030ではＴＫ73型式、上人ヶ平14号墳ではＴＫ208型式、弓田遺跡ＳＤ95062ではＴＫ47型式の須恵器が出土している。上人ヶ平５号墳や上人ヶ平16号墳では近接する古墳から出土した須恵器からＴＫ216型式段階に併行する。また、上人ヶ平９号墳とほぼ同時期と考えられる上人ヶ平10号墳からはまとまった土師器資料が出土しており、辻美紀氏は須恵器編年のＴＫ47型式の前後に位置づけている。[注5]

したがって、Ｃ２群はＴＧ232～ＴＫ216型式段階に、Ｃ３群はＴＫ73～ＴＫ208型式段階に位置づけられる可能性が高い。Ｃ４・Ｃ５群はＴＫ47型式段階に位置づけられるが、Ｃ４群はＴＫ47型式段階よりも若干古く位置づけられるかもしれない。また、良好な土器資料のみられないＣ

１群は須恵器出現の前後に位置づけられる可能性が高い。

一方、共伴する円筒埴輪をみると、Ｃ１～Ｃ３群は川西編年のⅣ期に、Ｃ４・Ｃ５群は同じくⅤ期に位置づけることができる。この点は土器との併行関係にも特に矛盾はみられない。

以上から、Ｃ系統は古墳時代中期中頃から古墳時代後期前半に位置づけられると考える。

４．若干の検討

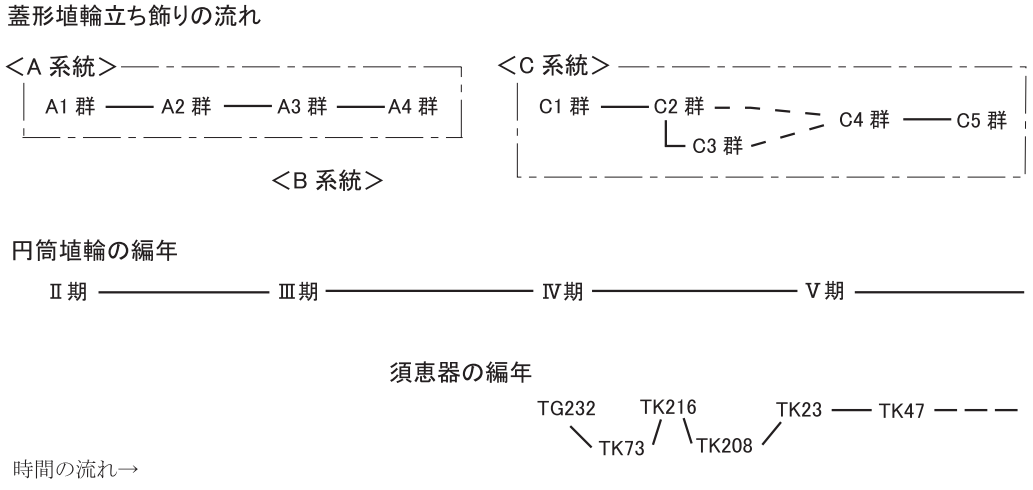
以上、蓋形埴輪の立ち飾りの分類と変遷ついてみてきた。立ち飾りの分類では大きく３系統の存在を示したが、このほかにも系統としてまとめることができないものが多数ある。それは蓋形埴輪の立ち飾りの多様性を示すものと考える。

今回検討を加えたＡ～Ｃの各系統について、その変遷と、円筒埴輪や土器編年との対応関係を簡単にまとめると、第６図のようになる。以下、第６図から読み取れることを述べていくことで、検討としたい。

Ａ１群は、先行研究でも明らかにされているように、蓋形埴輪の出現期であるとともに、器財埴輪の成立段階にも当たる。同時期に成立したのは盾形埴輪のみと考えられている。Ａ２群が出土した長原40号墳では、靫形埴輪や草摺形埴輪などの小片が出土しており、推測もあるが、この段階以降、他の器財埴輪が伴うようになったと考えられる。

一方、Ｂ系統のものは、内田山Ｂ１号墳においてＡ３群の資料と同一古墳から出土した点をふまえると、Ｂ系統のものはＡ３ないしＡ４群と併行関係にあると考えられる。ただし、文様の分割基準という点からみると、Ｂ系統のものは後に続かず、その成立過程も明らかでない。

Ｃ系統のものは、その成立が須恵器の出現と相前後している可能性が高いことを示した。そして、第６図でも明らかなように、Ｃ系統はＡ系統ともＢ系統とも連続性や影響は認めがたく、全く別の文様系統であることが明らかである。このことは、誉田御廟山古墳(伝応神陵古墳)をはじめとする大型前方後円墳の築造に伴って、従来とは異なる新たな器財埴輪の生産も開始されたことを示している可能性が高い。しかも、この段階は窖窯焼成を利用した円筒埴輪の大量生産が開



第６図　蓋形埴輪立ち飾り変遷概念図

始された時期に重なり、埴輪生産に関して、前段階と一線を画したような内容が目立つ。そのような意味において、この段階、すなわちＣ１群の成立というのは重要な画期といえるかもしれない。

以上の点は、川村氏をはじめ、すでに何人かの方によって指摘されており、須恵器出現を相前後する頃の埴輪生産の動態が古墳時代中期を考える上で、大きく注目されることとなっている。

Ｃ系統について、もう１つ注意されるのは、Ｃ３群とＣ４群の間にみられる断絶性である。この段階は須恵器編年でいうと、ＴＫ23型式段階にあたり、わずかな空白期にも関わらずその前後での立ち飾りの変化が大きい。こうした現象を埴輪生産の退潮とする考え方も可能であるが、その要因は明らかでない。蓋形埴輪でみると、Ｃ１～Ｃ３群までの典型的なあり方がＣ４・Ｃ５群のような形骸化に著しい段階に進むのは、ＴＫ23型式段階とその前後に、埴輪生産のあり方を左右するような事象が存在することを示唆しているのではないだろうか。今後、このＴＫ23型式段階における画期性についても検討していく必要があるだろう。

５．おわりに

蓋形埴輪について、立ち飾りを対象に、その分類と変遷、各型式群の意義について述べてきた。扱った資料数が限られることや、最近の新しい研究成果を十分に取り入れることができなかったなど、やや不十分な内容となってしまった。また、先行研究と重複するような内容も多く含まれているのではないか、と感じる所である。

しかし、蓋形埴輪、特に立ち飾りについて筆者の考えることを少しでも述べることができたと思う。今回不十分だった点や笠部の検討などについては別の機会をもちたいと思う。

付記

本稿は、「はじめに」にも記したように、平成17・18年度に実施した共同研究「器財埴輪の変遷と地域性の検討」の成果によるものであるが、諸事情により、研究報告の機会が著しく遅延してしまった。本稿は、上記の共同研究ならびに平成18年度に実施した上人ヶ平５号墳の調査に伴う整理作業の際に構想したものであるが、この間、小栗明彦氏による「蓋形埴輪編年論」が公表された。[注6] 筆者が蓋形埴輪の編年研究における課題と考えていた内容をほとんど網羅し、小栗氏自身が「円筒埴輪編年にさほど劣らない精度の編年案を提示できる」と述べられた大部な論文である。本稿の内容は、扱った資料数や、編年の精度などにおいて、全く小栗論文には及ばないが、筆者自身の考えを整理する意味でも本稿を構想当初に近い形で発表することにした。

（つつい・たかふみ＝当調査研究センター調査第２課調査第３係調査員）

注１　蓋形埴輪の代表的な先行研究は以下のとおりである。

田中秀和「畿内における蓋形埴輪の検討」（『ヒストリア』第 118 号　大阪歴史学会）1988
高橋克壽「器財埴輪の編年と古墳祭祀」（『史林』第 71 巻第２号　史学研究会）1988
松木武彦「蓋形埴輪の変遷と画期」（『鳥居前古墳～総括編～　大阪大学文学部考古学研究報告』第１冊　大阪大学文学部考古学研究室）1990
川村和子「５世紀代の蓋形埴輪の変遷」（『西墓山古墳　藤井寺市文化財報告』第 16 集　藤井寺市教育委員会）1997
伊賀高弘「上人ヶ平古墳群の蓋形埴輪」（『京都府埋蔵文化財情報』第 32 号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1989
櫻井久之「形象埴輪からみた長原 40 号墳の編年的位置」（『大阪府平野区長原遺跡発掘調査報告』（財）大阪市文化財協会）1991

注２　石山古墳：筒井正明編『石山古墳　第 24 回三重県埋蔵文化財展』三重県埋蔵文化財センター　2005
金蔵山古墳：鎌木義昌・西谷真治『金蔵山古墳　倉敷考古館研究報告』第１冊　倉敷考古館　1959

注３　川西宏幸「円筒埴輪総論」（『古墳時代政治史序説』塙書房）1988
なお、近年、円筒埴輪編年の細分が大きく進んでいるが、それは地域を単位とするものであり、より広い地域の蓋形埴輪を対象とする本稿では、地域の資料に基づく円筒埴輪編年ではなく、従来の川西宏幸氏の編年案を参考にした。

注４　小栗明彦氏は報告とは異なる復原案を提示されており、筆者もこれが実態に近いのではないかと考える。小栗明彦「蓋形埴輪編年論」（『埴輪論考　大阪大谷大学博物館報告書』第 53 冊　大阪大谷大学博物館）2007

注５　辻美紀「古墳時代中･後期の土師器に関する一考察」（『国家形成期の考古学』　大阪大学考古学研究室）1999

注６　注４文献に同じ

第２～５図に使用・引用した実測図は各報告書・論文から転載したが、出典については紙幅の関係上省略させていただいた。ご寛恕を請う次第である。また、実測図については一部改変し、トリミングしたものがある。

1.仲ノ段（なかのだん）遺跡第３次

所 在 地　福知山市大江町北有路地内

調査期間　平成21年６月23日～８月28日

調査面積　500㎡

はじめに　今回の発掘調査は、国道175号の改修に伴い、京都府交通建設部の依頼を受けて実施した。仲ノ段遺跡は由良川左岸の丘陵縁辺部に立地している。今回の事業に先立ち範囲確認の第２次調査を行った。その結果を受けて、第３次調査として遺構および遺物が顕著に見られた試掘箇所を拡張して調査を行った。

調査概要　北側の１区では､最上面において近世の土坑およびピットを確認した。その下では、東側を流れる由良川に向かって傾斜する谷地形を確認し、谷の堆積土から古墳時代後期から鎌倉時代にかけての遺物が多量に出土した。遺物には、須恵器、土師器、緑釉陶器、瓦器椀、白磁・青磁、土錘、銭貨(天禧通寶(初鋳年1017年)・洪武通寶(初鋳年1368年))などが出土した。近世段階には谷が埋没を完了し、現地形の平坦面を形成していたことが判明した。

また、下層には谷が埋没を始めた段階の黒褐色粘質土の堆積層があり、縄文時代後期前半の土器・石器(サヌカイト製や黒曜石製の石鏃、切り目石錘、磨石など)を包含していた。

２区では、近世以降の盛り土層の下で、厚さ数cmの包含層を確認し、その下の地山上で、近世の土坑、溝、ピットを検出した。

まとめ　今回の調査により出土した遺物から丘陵端部の平坦地には、古墳時代から鎌倉時代の集落が存在していることがわかった。

また、谷に堆積した縄文時代の遺物が出土したことから、調査地の西側に派生する丘陵端部の平坦地に同時代の居住地が想定される。出土したサヌカイトおよび黒曜石の剥片は居住地内で石器製作を行っていたことが考えられる資料である。縄文後期の遺跡は旧大江町内では当遺跡より下流左岸の自然堤防上に立地する三河宮の下遺跡に次いで２例目となった。

（柴　曉彦）

第１図　調査地位置図
（国土地理院　1/25,000　河守）

2.天田内（あまたうち）遺跡第２次

所 在 地　福知山市大江町天田内

調査期間　平成21年４月21日～６月12日

調査面積　350㎡

はじめに　今回の発掘調査は、府道綾部大江宮津線の改良工事に伴って、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。天田内遺跡は、旧大江町教育委員会による遺跡の範囲確認調査（第１次調査）に引き続き、第２次調査となる。なお、今回の調査に先立つ京都府教育委員会による立会調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物が出土した。また現在の府道の新設工事（昭和34年）の際にも多数の遺物が出土したと伝えられており、今回の調査でも遺構・遺物の検出が予想された。

調査概要　府道の改良工事は現府道の拡張と歩道の新設を目的としていたため、調査区の幅は限られたものにならざるを得なかった。また、宅地や畑地との関係上、調査区を大きく４地区に分け、小規模なトレンチを設けた。調査により、２区を中心に多数の遺物が確認されたため、当初排土置き場としていた箇所についても調査を実施した。以下、調査の成果について述べる。

１区では、土師器や須恵器などの土器片がごく少量出土したが、調査区の大半は現在の府道が新設される以前の道路や宅地等の撹乱により、顕著な遺構は検出されなかった。なお、１区の北半部が京都府教育委員会による立会調査地である。

２区は、今回の調査で多数の遺物が出土した。現在は畑地となっているが、基本的な層序は、上から耕作土、黒褐色シルト、黒灰色シルト、黒色シルト、地山となる。特に黒褐色シルトからの遺物の出土が多い。遺構は堆積層中での検出は困難で、地山上で確認したものにとどまる。検出した遺構としては、土坑・柱穴などがあるが、調査範囲が狭いため、建物に復原することはできなかった。また、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺物が多数出土したものの、竪穴式住居跡等の遺構を検出することはできなかった。出土地点別の遺物をみると、京都府教育委員会による立会調査地から２区の南半にかけては、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が多く、２区の中央から北半にかけては古墳時代後期のものが多い。ただ、上述のように、竪穴式住居跡等の遺構を確認できなかったこ

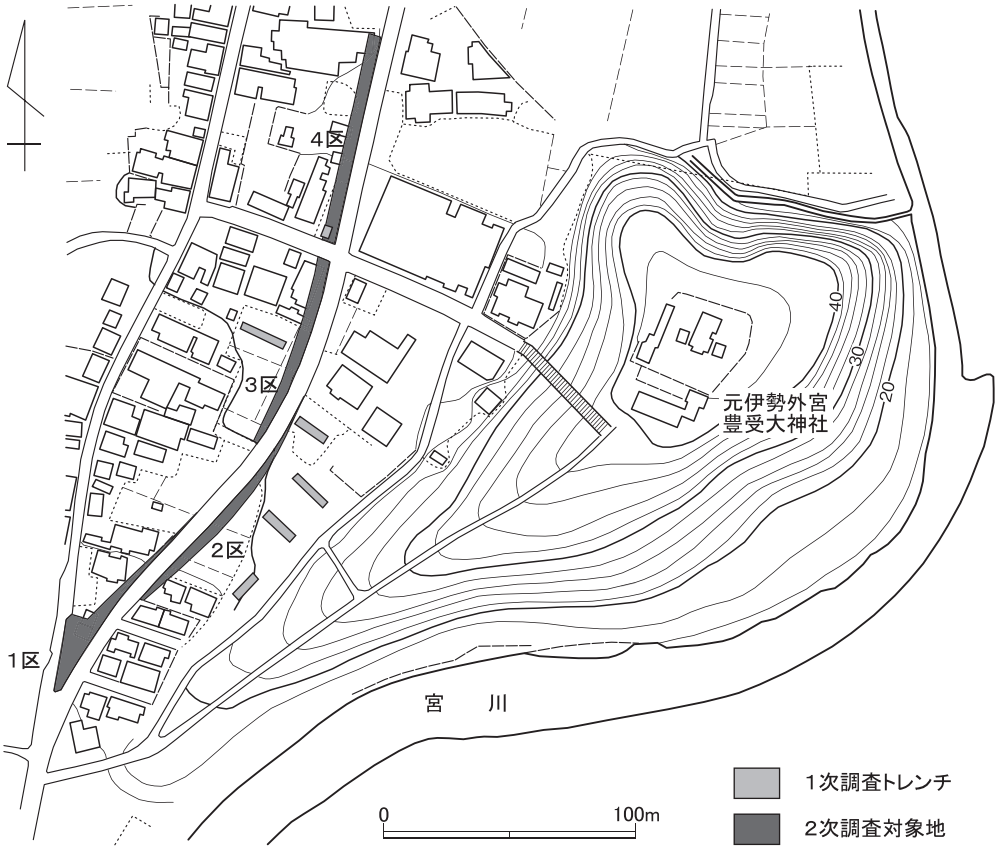
第１図　調査地位置図
（国土地理院　1/50,000　大江山）

と、遺物が地山面より30～40cmより上で多数出土したことなどから、これらの遺物は２次堆積したものと考えられ、集落の中心は今回の調査地から少し離れた地点に営まれたものと思われる。

３区・４区では、３区南半部で２区から続く遺物包含層を確認したが、それよりも北側では宅地の建設、昭和34年の府道建設などによって削平されていたため、少量の遺物は出土したが、顕著な遺構は検出されなかった。

まとめ　調査範囲が限られていたため、顕著な遺構は検出されなかったが、２区を中心に多数の遺物が出土した。これらの遺物は上述のように弥生時代後期から古墳時代後期にかけてのものである。昭和34年に現府道が新設された際にも多くの遺物が出土したと伝えられることから、今回の調査地周辺に当該期の集落が広がっていると考えられた。ただ、今回の調査では竪穴式住居跡等の遺構を検出することはできなかったので、今後の周辺の調査に期待される。

（筒井崇史）



第２図　調査地周辺地形図

3.河守北遺跡第８次

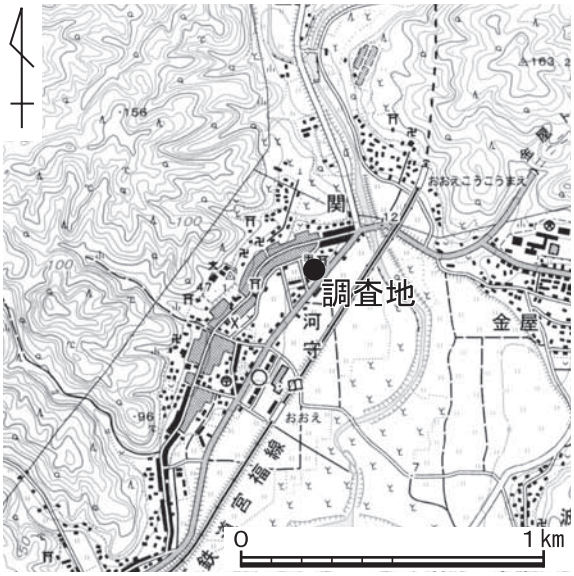
所 在 地　福知山市大江町河守

調査期間　平成21年４月30日～６月16日

調査面積　150㎡

はじめに　河守北遺跡は近畿北部最大の河川由良川と、その支流である宮川によって形成された低位段丘上に位置する。古くから丹後・丹波を結ぶ重要な地点にあったことが考えられる。山裾には旧街道が通り、街道西側の山麓には中世から続く神社仏閣が存在している。近世には、丹後宮津へ抜ける街道筋の宿場町として栄えた町並みが現在も残っている。今回の発掘調査は国道175号新設改良工事に伴い、京都府交通建設部の依頼を受けて実施した。

調査概要　調査では、包含層直下において17世紀前半の屋敷地の一部を検出した。山裾の地形に沿うように石組および木組みの暗渠状の上水施設が造られ、下水を流す素掘りの排水溝も検出した。屋敷地内には、上水(谷水)を引き込んだ末端部に石積みが施された溜め桝が築かれ、調査中も豊富な湧水が見られた。屋敷地へ上水を引き込む部分は瓦質土管が利用され、排水溝と平行する部分は溝の肩部分に４列に杭を打ち込み、その杭を基礎として土管を敷設し通水していた。頻繁に利用された溝は木組み→土管→石組みと数回にわたり構造の改変が見られた。屋敷地に伴う石組み溝は丁寧に造られ、拳大の川原石を通水部が幅３cmとなるように並べていた。その上に蓋石を置き、蓋石が動かないように礫や瓦で充填した地下埋設溝となっていた。木組み溝は丸太を杭で固定し、丸太の上面にかまぼこ板状の蓋板を被せ、埋め戻されていた。出土遺物は陶磁器、すり鉢、平瓦、金属製品、瓦質土管などがある。



第１図　調査地位置図
（国土地理院　1/25,000　河守）

下層では、５世紀前半のピットおよび土坑がある。調査範囲の幅が狭く、建物としての復元は不可能であった。

まとめ　文献によると河守の地は宮津細川藩領となっており、河守城下町の一画を把握できた。近世の街道筋は江戸時代中期に数度の大火で町屋が焼失しているが、現在も短冊状の屋敷割の景観は残されている。その街道筋から一段低い部分で17世紀前半の屋敷関連遺構が見つかったことは、城下町の広がりを考える上で重要な調査となった。

また、周辺には古墳時代の集落跡が展開している可能性がある。　（柴　暁彦）

4.深志野（ふかしの）古墳群

所 在 地　船井郡京丹波町曽根深志野

調査期間　平成21年５月８日～７月３日

調査面積　約300㎡

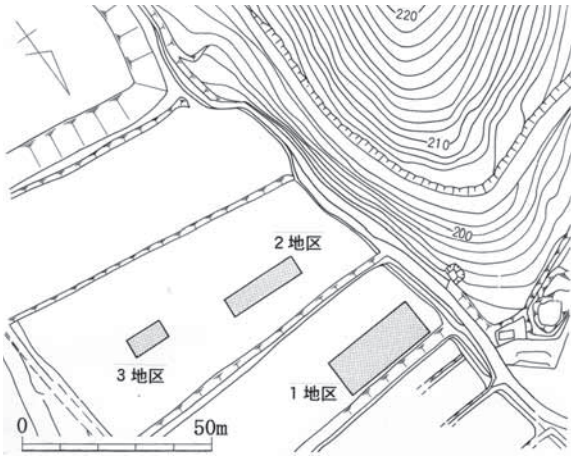
はじめに　深志野古墳群は、巫女形埴輪を出土したことで著名な塩谷古墳群の南東部に展開する古墳群である。京都府遺跡地図には８基（１～８号墳）の横穴式石室墳が掲載されているが、昭和40年代の水田圃場整備により墳丘の起伏は完全に消失し、現況は扇状地性の緩斜面に田畑や栗林が広がる。今回の調査地は深志野古墳群の最南端にあたり、古墳の痕跡やその他の遺構の有無を確認するため、３か所の調査区（１～３地区）を設定して調査を開始した。

調査概要　１地区では、その北東部において屈曲する溝を検出したが、出土遺物はなく古墳に伴うものとの確証は得られなかった。その他の遺構はないが、近・現代の新しい埋め土から古墳時代から近世にかけての土器が若干出土した。２地区は比較的顕著な遺構・遺物の検出をみた調査区である。遺構は自然流路１条、土坑１基、多くの杭跡である。流路は南西から北東方向に直線的に掘られている。長さ20m、幅２～2.5m、深さ30～40cmを測る。検出面にて縄文時代から平安時代にかけての土器がわずかに出土した。谷川の自然流路とみられる。土坑は直径1.5×2.2mを測る歪な円形である。須恵器小片が埋土中から出土した。３地区では、３基の杭跡を検出したのみで、出土遺物もなく、顕著な成果は得られなかった。

まとめ　今回の調査では、縄文時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代さらに近世の遺物が出土し、平安時代以前の自然流路や土坑・杭跡などの遺構もみつかった。しかし、深志野古墳群に関するものはなく、今回の調査地では古墳の築造はなかったと思われる。

（黒坪一樹）

第１図　調査地位置図（国土地理院 1/25,000 園部）
１．深志野古墳群 ２．塩谷古墳群 ３．宮の浦古墳群



第２図　調査トレンチ配置図

5.長岡宮跡第473次・南垣内（みなみかきうち）遺跡

所 在 地　向日市寺戸町南垣内56－1ほか

調査期間　平成21年7月3日～7月28日

調査面積　60㎡

はじめに　今回の調査は、平成21年度主要地方道上久世石見上里線地方道路整備事業に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。調査地は標高26m前後の向日丘陵上に位置する。長岡京の条坊復原では、長岡宮跡北辺官衙、宮内西一坊坊間大路が想定される。また、縄文時代から中世にかけての南垣内遺跡が含まれる地点である。今回の調査は、幅２m、長さ30mのトレンチを設定し、遺構・遺物等の確認を行った。

調査概要　調査により土坑・溝・井戸などを検出した。以下、主要なものについて概述する。

土坑ＳＫ01は、直径1.2m、深さ0.8mの円形を呈し、茶褐色土・暗青灰色泥土が堆積する。遺物は中世の土師器・瓦器・白磁のほか、上部が家形を呈し、半裁された石塔が出土した。これには、「南無□」の文字が刻まれていた。この遺構は土壙墓の可能性が残る。溝ＳＤ03は、北で西に約８°振れる東西方向の溝である。溝幅1.2m、深さ0.5mを測り、断面は「Ｖ」字状を呈し、砂礫・泥土が互層に堆積する。自然流路と思われる。遺物は古墳時代後期の土師器高杯、須恵器高杯が出土した。井戸ＳＥ05は、直径３m以上、深さ1.2m、断面擂鉢状を呈し、底面付近では暗黒灰色泥土が堆積する井戸跡である。遺物は土師器・磁器（染付け）が出土した。溝ＳＤ07は、北で東に約５°振れる東西方向の溝である。溝幅は、北半がトレンチ外であるため不明であるが、断面はＵ字形を呈し、幅0.5m以上、深さ0.4mと推定する。遺物は、平安時代の土師器・須恵器・古瓦・磚等が出土した。

調査地位置図
（国土地理院　1/25,000　京都西南部）

まとめ　調査の結果、長岡宮跡に関連する資料は得られなかった。しかし、小さな調査区ではあるが、重要な成果が得られた。溝ＳＤ03は古墳時代の遺物が出土しており、当調査地の東側20mの長岡宮跡第126次調査で検出された平安時代の溝ＳＤ12603と同じ規模・形態・堆積土・方位である。これらのことから、同一の連続する溝と思われるが、出土遺物の時期が異なる点に問題が残る。溝ＳＤ07は、平安時代の「湯屋」が発見された宝菩提院廃寺に関連する遺構と考えられ、寺域を考察する上で貴重な資料である。

（竹井治雄）

6.長岡京跡右京第971次・松田（まつだ）遺跡

所 在 地　乙訓郡大山崎町字円明寺小字一丁田

調査期間　平成21年４月21日～６月10日

調査面積　150㎡

はじめに　調査対象地は、長岡京条坊復原図（旧条坊）によれば右京九条二坊十三町にあたり、古墳時代～中世にかけての遺跡である松田遺跡の範囲に含まれる。松田遺跡の中心地域である大山崎中学校校内の調査では、古墳時代から飛鳥時代にかけての竪穴式住居跡が10基検出されている。また、隣接した下植野南遺跡では、名神高速道路の拡幅工事に伴う調査で、同時代の多数の住居跡や溝などが確認されている。今回の調査は、古墳時代後期の竪穴式住居跡と推定される遺構を確認した右京第963次調査の南半部分を拡張して実施した。この調査は府道大山崎大枝線新設改良工事に伴うものである。

調査概要　調査地には約３ｍの現代盛土層があり、その下に約２ｍの厚さで小泉川の氾濫による礫層が堆積していた。礫層の下に青灰色系の粘質土が１～0.5ｍ堆積し、その下で暗青灰色土・暗青褐色土・褐色土の遺物包含層及び、竪穴式住居跡や土坑を検出した。竪穴式住居跡ＳＨ02は一辺4.5ｍの方形プランで、床面までの深さ0.2ｍを測る。周壁溝はない。北側中央部に竈が付き、その中央に土師器甕が置かれていた。また、竈の東側の土坑（貯蔵穴）の横に土師器甕があり、住居床面に多数の須恵器が散在していた。竈付近や東側辺に焼土・炭化材が多数検出されたことから、焼失住居の可能性が高い。土坑ＳＫ06は3.1×1.8ｍの楕円形で、深さ0.5ｍを測る。出土した土器から、これらの竪穴式住居跡・土坑は６世紀前半頃のものと思われる。

まとめ　調査では、長岡京期の遺構は検出しなかったが、松田遺跡の古墳時代集落の一部を調査したものと推定される。（石尾政信）

第１図　調査地位置図
（国土地理院　1/25,000　淀）

第２図　竪穴式住居跡SH02全景

7.長岡京跡右京第974次調査・松田（まつだ）遺跡

所 在 地　乙訓郡大山崎町字円明寺小字一丁田

調査期間　平成21年６月１日～７月31日

調査面積　300㎡

はじめに　長岡京跡右京第971次調査の北側に隣接した調査地である。平成21年１～３月に実施した長岡京跡右京第963次では、古墳時代後期の２基の竪穴式住居跡状の遺構を検出したが、そのうち北側の住居跡を中心として発掘調査を実施したものである。調査対象地は、長岡京条坊復原図（旧条坊）によれば右京九条二坊十三町にあたり、古墳時代～中世にかけての遺跡である松田遺跡の範囲に含まれる。この調査は京都縦貫自動車道路建設工事に伴うものである。

調査概要　調査地には約３ｍの盛土層があり、その下に約２ｍの厚さで小泉川の氾濫堆積である礫層、その下に１～0.5ｍの厚さで青灰色系の粘質土が堆積し、その下で遺物包含層と遺構を確認した。遺構は、竪穴式住居跡や土坑がある。竪穴式住居跡ＳＨ01は6.5×7.0ｍの方形プランで、床面までの深さ0.3ｍを測る。周壁溝はない。北側辺の中央部に竈が付き、土師器高杯を支脚として置く。住居内で４つの柱跡を検出した。竪穴式住居跡ＳＨ10は、竪穴式住居跡ＳＨ01の南西約４ｍで検出したもので、竪穴式住居跡SH01と同一方向を向き、北側辺を揃えている。平面規模は3.5×3.5ｍ以上で、深さ0.25ｍを測る。周壁溝はなく、１か所で柱穴を検出した。また、竪穴式住居跡ＳＨ10の北側で、規模が5.5×4.0ｍ以上、深さ0.5ｍの円形土坑を検出した。これらの遺構は出土土器から５世紀後半のものと推定される。

まとめ　長岡京期の遺構を検出しなかったが、古墳時代後期の竪穴式住居跡を検出した。２基の竪穴式住居跡は同一方向を向き、松田遺跡の古墳時代集落の一部と推定される。また、松田遺跡と下植野南遺跡は一続きの遺跡である可能性が高くなった。　（石尾政信）

第１図　調査地位置図
（国土地理院　1/25,000　淀）

第２図　竪穴式住居跡SH01全景

8.女谷（おんなだに）・荒坂（あらさか）横穴群

所 在 地　八幡市大字美濃山荒坂

調査期間　平成21年７月10日～平成22年２月27日（予定）

調査面積　2,000㎡

はじめに　今回の発掘調査は、新名神高速道路整備事業に伴い西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した。女谷・荒坂横穴群は、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての遺跡である。第二京阪道路および一般国道１号の建設工事に伴い平成11年度から平成14年度まで発掘調査が実施され、総数約50基に及ぶ横穴から人骨を含む多くの遺物が出土し、当時のこの地域の墓制を知る上で貴重な資料が得られた。今回の調査地は遺跡の北東部にあたり、過去に調査された谷より南西方向にある別の谷に位置する。昨年度に引き続き、範囲確認と発掘調査を実施することとなった。

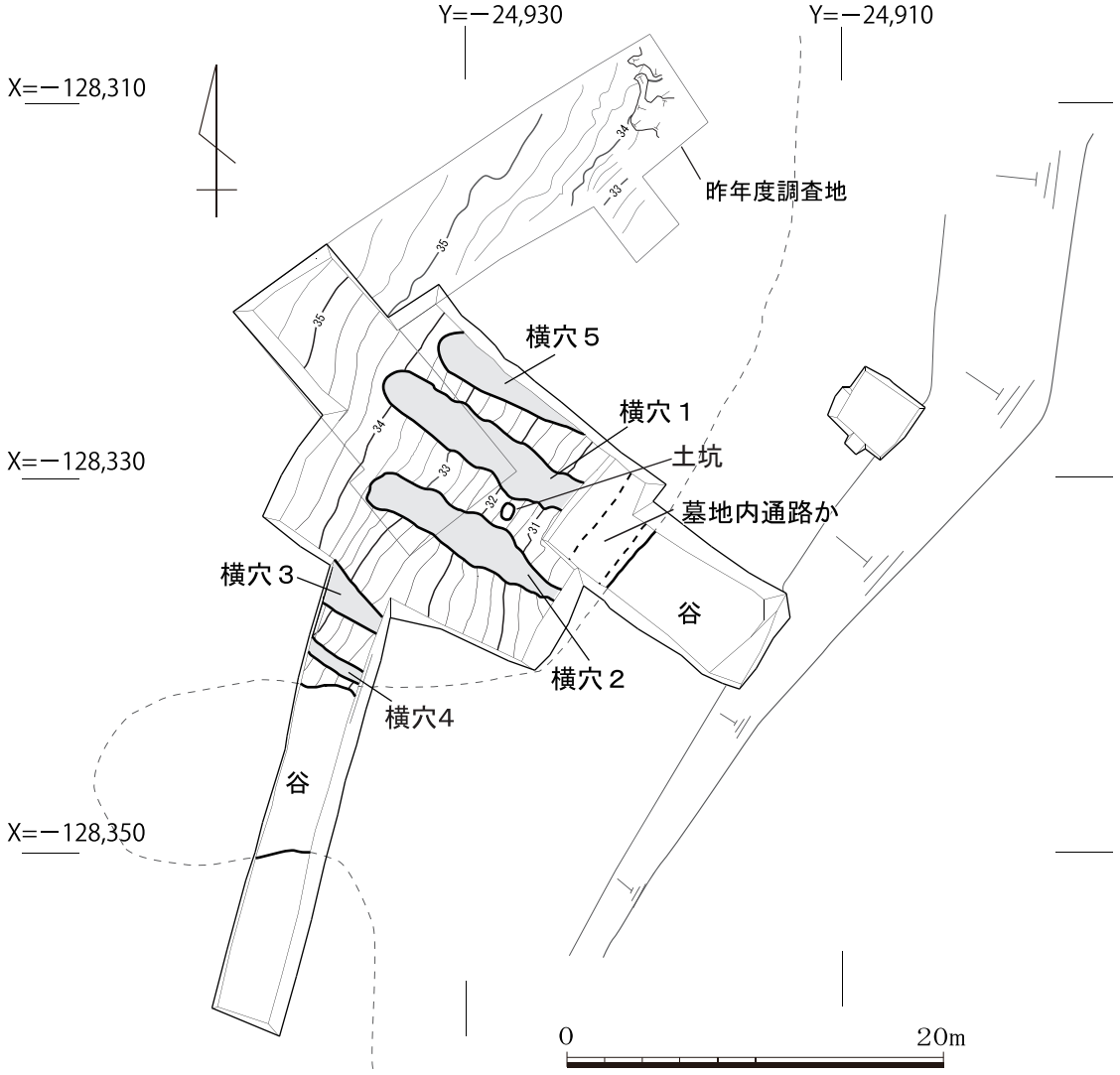
調査概要　昨年度谷の北側斜面で確認した２基の横穴部分を拡張するとともに、昨年度調査地の西側と南側に調査区を設定して、横穴群の広がりと谷の南側斜面の状況を確認することを目的として実施した。その結果、新たに３基の横穴と土坑１基、墓地内通路を確認した。また、西側の調査地中央付近では北に延びる小さな谷地形を確認した。

なお、南側の調査区は谷の中央部の最も深い所に位置しているものと考えられ、地表下約２ｍを掘削してもベースとなる土層に至らなかった。

調査を実施した２基の横穴の規模および形態は、次のとおりである。横穴１は玄室長3.5m、玄室最大幅2.5m、墓道長8.2m以上、墓道の上幅２ｍを測り、横穴２は玄室長2.1m、玄室最大幅２ｍ、墓道長９ｍ以上、墓道の上幅２ｍを測る。いずれも玄室の平面形は羽子板形である。羨道の有無は不明である。横穴１の玄室内からは金環や鉄鏃のほか須恵器の杯蓋・高杯が、横穴２

第１図　調査地位置図
（国土地理院　1/25,000　淀 を1/2縮小）

第２図　調査地全景（南東から）



第３図　遺構配置図

の玄室内からは金銅製耳環や須恵器の提瓶・杯身・杯蓋・高杯が出土した。横穴２の床面には入口付近のみ礫敷が施されていた。また、横穴２の墓道底面の中央付近には水抜用と考えられる土坑が掘削されており、墓道の埋土からは須恵器がまとまって出土した。細片化しているものが多いことから、追葬もしくは再利用の時に玄室内の遺物が掻き出されたと考えられる。

２基の横穴の墓道の先端では、墓道と直交する溝状の遺構を確認した。墓地内通路である可能性が考えられる。横穴１の墓道と横穴２の墓道の間で確認した土坑からは須恵器がまとまって出土した。

まとめ　今回の調査では谷の中央から奥の北側斜面に５基の横穴と墓地内通路、小さな谷地形を確認し、横穴２基を調査した。谷の入口側（横穴５の北側）にも横穴が存在する可能性がある。また、谷の南側斜面については、調査区を設定して掘削を行ったものの、斜面自体を確認することができなかった。調査区よりもさらに南方に位置すると考えられる。今後、調査地を拡張して、残りの横穴等の調査を実施する予定である。　（松尾史子）

遺跡でたどる京都の歴史７

中世の京都

はじめに

平清盛による平氏政権の成立から豊臣秀吉による天下一統までを中世と呼んでいます。この時代は武家政権が成立して政治権力が分散化し、荘園などの土地支配や人々の支配・従属関係も重層化した時代でした。この萌芽は、白河法皇による院政が始まった11世紀後半に現れますので、院政期は中世初期と考えることができるでしょう。また、中世は南北朝の騒乱を境に中世前期と中世後期に区分することが出来ます。本稿では、屋敷・居館・城と墳墓・経塚を軸に、この時代を特徴付ける遺跡を概観していきます。

屋敷・居館・城

久世郡久御山町の佐山遺跡の居館は中世初期に成立しました。巨大な濠で囲まれた１町四方を占めると推定されるこの居館は、古代にこの地にあった荘園の管理施設である政所を前身として造られたと考えられます。福知山市の上ヶ市（うわがいち）遺跡では大溝に囲まれた中世前期の居館がみつかりました。これらの居館の主は、荘園を寄進して荘官の地位を得た開発領主（かいほつりょうしゅ）もしくは荘園領主が現地に派遣した荘官と考えられ、寄進地系荘園の盛行とともに現れる遺跡ということができます。

相楽郡精華町の椋ノ木（むくのき）遺跡では遺構の分布状況の変化から、建物の散在する11世紀までの景観が、12世紀中頃には条里型の方格地割に従った溝に囲まれた屋敷地がまとまりを見せる景観に変化したことがわかります。屋敷を囲む溝などからは、中国製の陶磁器や東海地方産の陶器鉢など、遠隔地産のさまざまな遺物が出土しました。この頃から、手工業生産の増大と流通の発展により焼物などの物資が大量に遠隔地まで運ばれることが多くなります。椋ノ木遺跡は木津川左岸の相楽郡と綴喜郡の境界にあったと想定される川湊を押さえ、木津川舟運とかかわりを持っていたと考えられます。

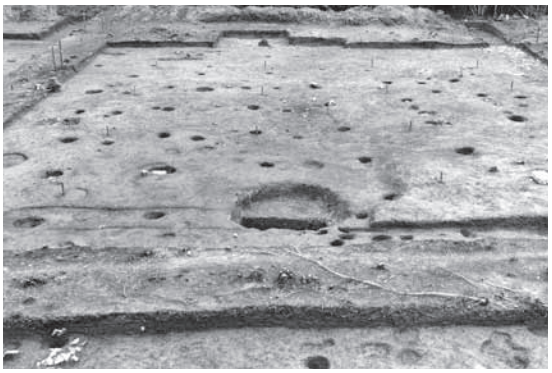
佐山遺跡の濠

椋ノ木遺跡の溝に囲まれた屋敷地

これらの屋敷地は濠や溝と柵で囲まれていることが多いのですが、高い土塁を築いて防御を固めているものはありません。大規模な土塁を築くようになるのは、中世後期のことです。この変化は福知山市の大内城（おおうちじょう）跡でよくわかります。大内城跡

は東西に延びる尾根上に立地しています。中世前期には低い土塁と柵で囲まれた屋敷地の中に数棟の建物が建ち並んだ屋敷地で、平資基（すけもと）や池大納言平頼盛（よりもり）を領家とした六人部荘（むとべのしょう）を管理する荘官の居館と推定されます。この居館は、中世後期になると高い土塁と腰曲輪（こしぐるわ）を備えた山城に変貌します。この変化は、国人に成長した在地領主層が地域の有力農民層を被官化し、軍事力を背景に周辺の国人と合従連衡を繰り返していたこの時代を表すものです。鎌倉時代までの遺物が大量に出土するのに対して、南北朝時代以降の遺物がほとんど出土しないことも居館から城への変化を示しています。このように、調査を行っても遺物があまり出土しない山城が多く、平時は麓で生活していたと考えられますが、中世後期の平地居館はほとんどみつかっていません。

一方で、綾部市の平山城館跡（ひらやまじょうかん）や舞鶴市の大俣城跡（おおまたじょう）は、多量の遺物が出土することから、戦時に逃げ込むだけではなく、山城で日常生活が営まれていたものと推定されます。平山城館跡では、大きな平坦面のある郭（くるわ）に大小３棟の建物が建ち並び、白磁皿や土師器皿が出土する住居用の建物と青磁や天目茶碗などが出土する茶室などに使い分けられていたと推定されます。また、１段高い郭には、礫敷きの礎石建物があり、甕が多く出土することから倉庫などに使われていたようです。平山城館跡の西側斜面では14条もの竪堀（たてぼり）がみつかりました。竪堀は城に攻め上る敵兵が斜面に沿って横方向に移動するのを防ぐものですが、これを連続して掘ることで防御機能を高めています。大俣城跡は小規模な山城ですが、屈曲する虎口（こぐち）とその前後の城道、郭の両端に取り付く竪堀など、城全体の構造がよくわかりました。これらの山城の最盛期は、明智光秀による丹波攻略が行われた頃です。


大内城跡の居館建物

平山城館跡の畝形竪堀群

大俣城跡

墳墓・経塚

中世初期から前期の屋敷地の一画には、しばしば墓が営まれます。この時期は、大きな親族集団である「氏」から直系家族である「家」が成立してゆく時期で、屋敷墓と呼ばれるこれらの墓はそれぞれの「家」の始祖の墓と考えられます。椋ノ木遺跡でみつかった屋敷墓のひとつには、白磁椀２点と土師器皿10点が副葬されていました。同時期の他の例では椀と４～５点の皿を副葬する例が多く、この墓は２倍の副葬品を持っていたことになります。

この時代には墓に埋葬される人はまだ少なく、遺体の多くは河原などに運んで処理されたと考えられますが、鎌倉時代になると墓に埋葬される人が多くなり、共同墓地が成立します。福知山市の大道寺跡では尾根の基部に営まれた経塚と先端の総供養塔に挟まれた空間に合計26基の火葬墓群がみつかりました。京田辺市の小田垣内遺跡では、戦国時代の土塁の中から石仏４基が立ったままの状態でみつかりました。石仏は石で囲まれた室町時代の墓の上に墓標として立てられていたのですが、戦時に急いで城が築かれたため、そのまま土塁に埋められたようです。与謝郡与謝野町の福井遺跡や地蔵山遺跡では、このような中世の墓地の姿を今も見ることができます。

大道寺跡の墓地の入口では、経典が残っていたことや全国で初めて竹製経筒の存在が確認されたことで特筆される大道寺経塚がみつかりました。この経塚は、墓地の成立に当たって墓地を結界し供養する目的で営まれたと考えられます。経塚とは、釈迦入滅後、正法･像法の時代を経て、仏法が正しく行われなくなる末法の世が来るとする末法思想に基づき、未来の仏である弥勒菩薩が生まれてくる弥勒下生の時まで経典を伝えようとしたものです。日本では1052（永承７）年が末法元年と信じられており、藤原道長が1007（寛弘４）年に造営した奈良県の金峯山経塚を最初として全国に流行しました。11世紀末には追善供養を目的とした経塚が現れ、12世紀後半以降は経典の保存という目的に加えて墓との結びつきを強めます。

椋ノ木遺跡の屋敷墓の副葬品

京都は全国的にみても多くの経塚が営まれた地域で、特に平安京周辺と丹後地域に集中しています。平安京周辺の経塚には京都市の鞍馬寺経塚や花背別所経塚のように多彩な埋納品を伴う経塚がみられます。これらは平安京の貴族を願主として12世紀を中心に造営されました。一方、丹後地域の経塚は鏡を埋納する例があるものの全体的に埋納品は乏しい傾向です。営まれる時期も12世紀後葉からで、大道寺経塚や同じく福知山市の高田山経塚のように墓地に伴って経塚がみつかる例が散見されます。丹後を中心に、丹波北部・但馬地域には、地面に掘った竪穴の側面に横穴を穿って土師器筒形容器などに納めた経典を埋めるという独特の構造のものも分布します。大道寺経塚もこの型式の経塚です。宮津市のエノク経塚では、ひとつの塚にこのような経塚が４基営まれていました。（森島康雄）

土塁に埋められた石仏（小田垣内遺跡）

エノク経塚

方形居館を囲む巨大な濠（佐山（さやま）遺跡）

佐山遺跡は、山城盆地中央部の久世郡久御山町に所在します。遺跡の北にはかつては巨大な遊水池であった巨椋池があり（昭和初期に干拓）、また南には木津川の本流が流れ、周辺は、古来、水運の盛んな地域として知られます。

発掘調査では、平安時代後期から鎌倉時代にかけての条里型地割に沿った幅７～８ｍの巨大な溝が検出されました。この溝は一町四方の方形居館を取り囲み、水をたたえた濠（ほり）と推定され、国内で最古段階のものであり、かつ最大級の規模を誇るものです。当初は、幅１ｍ前後の溝によって周囲を区画されたものでしたが、11世紀後葉までに巨大な濠を巡らせるようになり、13世紀中葉まで存続したことが明らかとなりました。濠で囲まれた屋敷地の内部では、総柱の掘立柱建物跡４棟、井戸２基、屋敷墓２基などが検出されました。

佐山遺跡は盆地の最低所にあり、増水による浸水被害を受けやすく、濠はたびたび掘削され、直されています。このことから、巨大な濠は防御機能があったとしても、その主たる機能は主に治水であったと考えられています。またもう一つの機能として、舟運を利用した交通・流通路としての機能が指摘されています。濠の南西部では溝の底に杭を垂直に打ち込み、横木をあてがった護岸遺構がみつかっていて、舟着場と考えられています。濠は水路で巨椋池や木津川と結ばれ、その水路網は淀川水系と通じる交通路となっていたようです。遺跡からは、東海系山茶椀、中国の褐釉陶器、西アジアのイスラム陶器などが出土し、遠隔地との交流を物語っています。

一町四方の濠に囲まれた居館を造った主は、果たして誰であったのでしょうか。『石清水文書』（『平安遺文』2959）には、保元３（1159）年に石清水八幡宮の極楽寺領に「居屋狭山」の名がみえます。これは佐山遺跡の居館の存続年代にあたることから、居館が史料にみえる「居屋狭山」であり、居館の主は在地領主層である可能性が指摘されています。濠からは、「政所」と墨書された灰釉陶器やいわゆる皇朝十二銭の延喜通寶（初鋳907年）が出土し、平安時代中期におかれた荘政所の故地と推定されます。このことが地域支配を進める在地領主層の拠点として選地された背景と考えられています。

濠の護岸遺構

（高野陽子）

お経を埋める（大道寺跡）

仏教の経典を書写し供養して、それを地中に埋納した場所を経塚と呼びます。わが国には慈覚大師が唐から伝えたとされ、およそ平安時代から江戸時代まで行われていました。経塚の造営は、1052年に末法の世が訪れるという末法思想が広がる中で、経典を後世に伝えようとして始まりました。奇しくも平安時代後期は疫病の流行や地震・戦乱などの災禍により、貴族を中心に末法思想が広がり、盛んに経塚が作られました。経塚の主な目的は、釈迦入滅後56億7000万年後に弥勒菩薩が現れ、三会の説法を行う際に備えて経典を残そうとするものです。やがて経塚は、極楽往生・解脱・現世の幸福を望むなど阿弥陀信仰や追善供養を求めるなど、時代が下るにつれてその目的は純粋な仏法護持から自己本位へと変容していきました。

昭和56年に実施した福知山市大道寺跡の調査で、丘陵上の中世火葬墓群の一画から13世紀初頭頃の経塚１基を検出しました。経塚は、一辺約1.3m、深さ約0.6mの土坑の側面に横穴を穿ち、経筒の外容器を納めていました。外容器は須恵質の甕と片口鉢の蓋が転用され、内部には銅製経筒１口と竹製経筒２口が納められていました。また、銅製経筒内には妙法蓮華経第三８巻と阿弥陀経１巻の一部が残っていました。竹製経筒は文献でのみ知られていましたが、実際の竹製経筒の出土は本例が初めてでした。出土品は一括して、京都府指定文化財として大切に保管されています。

大道寺跡は現在のＪＲ西日本電車基地の敷地内にあって、既に失われています。

（竹原一彦）

経塚検出状況

経筒外容器の内部

高僧の墓（三宝院宝篋印塔）

国指定重要文化財「三宝院宝篋印塔」は、真言宗醍醐派総本山醍醐寺境内の中の菩提寺と呼ばれる所にあります。菩提寺は醍醐寺第65代座主賢俊（1299～1357）が14世紀前半に再興し、住房としたところです。その東端は廟所となっており、宝篋印塔・五輪塔が立ち並び、室町時代以降の歴代門跡を祀っています。この中にある「三宝院宝篋印塔」は、鎌倉時代末期の様式を伝えるものです。寺伝によると、この宝篋印塔は、賢俊の菩提を弔うために建立されたとされています。

宝篋印塔が置かれた基壇は二段となっており、一段目は一辺約4.8mの壇上積みで、壇の上には宝珠を配した板石が各辺に３枚ずつ据えられています。二段目は葛石で囲んだ壇となっています。その上に地覆石、上下２石からなる台座を乗せ、宝篋印塔が据えられています。宝篋印塔は地覆石から相輪頂部まで高さ約2.5m、基壇を含めると約3.2mの高さとなり、雄大さをかもし出しています。

昭和58年に宝篋印塔・基壇が解体修理されることになり、それに伴い当調査研究センターが調査を行いました。その結果、宝篋印塔とその周囲から多数の埋葬施設が見つかりました。埋葬施設は、宝篋印塔の真下では上下三層となっており、最下層で甕の抜き取り跡、中・上層ではそれぞれ人骨を納めた信楽壺と常滑壺がありました。宝篋印塔の四周では、基壇の板石下で各辺に３基ずつ計12基、基壇の外側に３基ずつ計12基の埋葬施設が見つかりました。板石下部の埋葬施設は常滑・備前焼大甕などに人骨を納めていました。これらの大甕の一部は、基壇の板石を敷設したことにより壊されており、底部が打ち欠かれているものもありました。基壇外側の埋葬施設には、基壇内の大甕の底部や人骨の一部が残っているものもありました。

これらの調査成果から、現状の宝篋印塔・基壇ができるまでに３段階の変遷が考えられます。まず、中央１か所と基壇外側12か所で大甕が据えられ、骨が納められます。次いで、それらの甕・骨が抜き取られ、内側に甕・骨が移されて、中央に信楽壺が納められます。この時に、一部の甕の底部が打ち欠かれ、坑の中に残されたようです。最終的に現状の基壇が、甕列の上に設けられ、塔下に信楽壺が置かれます。この時に、基壇により、甕列の甕の口が壊されたようです。

重要文化財三宝院宝篋印塔（修理前）

醍醐寺三宝院所有　　写真：京都府教育庁指導部文化財保護課所蔵

このように、宝篋印塔を中心として多数の埋葬施設が見つかりました。歴代の醍醐寺の僧侶の墓と考えられますが、具体的な名前はわかりませんでした。そして、中央の宝篋印塔は、多数の埋葬施設に伴う総供養塔であったと考えられます。　（増田孝彦）

石垣を築いた城（田辺城）

現在の京田辺市役所の西側、「山手幹線」道路になっている所に、田辺城跡という城跡がありました。もとは、小高い丘の上です。室町時代頃の地元の有力者、田辺氏の居城といわれていますが、確証はありません。この城跡の調査で、丘の東斜面から入り口にあたる部分が見つかりました。

入り口は、５×3.5mの方形の平坦地で、正面（西側）に石垣を築いています。その石垣に沿って、南側に上部へ通じる石段が作られています。石垣と石段の間には、平瓦で護岸された溝が設けられています。北側と南側にも石を抜き取った跡などがあり、その部分にも石垣があったと考えられます。東側には門の礎石と考えられる石が置かれています。城郭の石垣が用いられているのは、通常、戦国時代末期以降ですが、このような状況は、近世の城の枡形虎口によく似ています。

石垣は、上部がかなり崩れています。地上に見えている部分で、２～３段の石積みが残っており、その高さは約0.9mです。本来は、上の平坦地まで、高さ約2.5mに積まれていたものと考えられます。石材は、面をそろえて平積みされています。石垣の傾斜角度は86°前後で、ほぼ垂直です。反りはありません。石材は、黒っぽい自然石と白い花崗岩の割石を使用しています。白黒を対比させて装飾的な効果を意図しているのかもしれません。なお、花崗岩の石材には矢穴が残るものがあります。この石垣には、自然礫を使った裏込めが施されています。地下部分には１石の根石が据えられています。

石垣を含む入り口部分は、大量の土砂で一気に埋まったものとみられます。北・南両側の石垣の石材も抜き取られています。このような状況から、人工的に壊されて埋められたものと考えられます。埋め土からは15世紀頃の瓦が出土しました。石垣の上の平坦地には瓦葺の建物があったと考えられます。普通、中世の山城の建物には瓦は使われません。石垣の上には何があったのか、また、なぜ壊されたのか、興味深いところです。ともかく、この石垣が、数少ない中世の石垣であることには変わりありません。なお、この石垣の石材は、京田辺市教育委員会に保存されています。

（引原茂治）

入り口部分と石垣

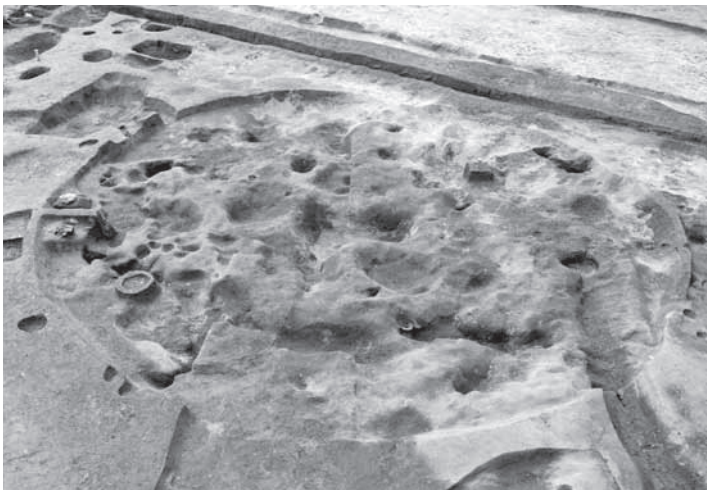
地震痕跡

1596（文禄５）年閏７月、M8.0クラスの大地震が京阪神地域を襲いました。この地震で時の権力者豊臣秀吉が築いたばかりの指月伏見城は倒壊し、各地が甚大な被害に見舞われました。特に伏見での被害が有名であったため「伏見地震」と呼ばれています。八幡市にある木津川河床遺跡ではこの地震の痕跡がたくさん見つかりました。

地中に残された地震の痕跡には様々なものがあります。発掘調査でよく見つかるのは、液状化現象とそれによって地中から砂が吹き上げられた噴砂の痕などです。京都府南部では、木津川河床遺跡のほか佐山遺跡、内里八丁遺跡、門田遺跡、市田斉当坊遺跡などで見つかっています。

木津川河床遺跡では、液状化現象や噴砂の痕がたくさん見つかり、この噴砂によって竪穴式住居跡や溝など弥生時代から中世までの遺構が引き裂かれていました(写真上)。また、噴砂のほかに液状化によって地面が幅数m、高さ１m程度盛り上がる曲隆という現象の跡も見つかっています。この曲隆により遺構が波打っているところもありました(写真下)。

木津川河床遺跡の噴砂



曲隆で床面が凸凹になった竪穴式住居跡（市田斉当坊遺跡）

これらの地震痕跡を覆って水平に堆積している地層から江戸時代の遺物が出土していることから、これらの地震の痕跡は室町時代から江戸時代にかけての時期に起きた大地震によるものと考えられます。また、液状化現象は、震度５以上の地震で起こることから、これらの条件を満たす地震は、冒頭に述べた伏見地震と考えられています。

現在、発掘調査により見つかった地震の痕跡を研究し、防災に役立てようとする地震考古学という分野が注目されています。発掘調査の成果は、歴史だけでなく、現在の生活を考える上で重要なことを私たちに教えてくれるのです。

（松尾史子）

参考文献：寒川旭『地震の日本史－大地は何を語るのか』中公新書　2007、『地震』大朽社　2001

雪舟の見た丹後国府中

宮津市府中地区は、日本三景のひとつ天橋立の北側に位置しています。ここは、成相山系が阿蘇海に迫っており、長さ２kmに満たない狭い平野しかありませんが、古代から、丹後国の中心として賑わっていました。

この府中地区には、国分という字(あざ)があることや、平安時代の硯や墨書土器、緑釉陶器などが見つかっていることから、丹後国府が置かれたものと推測されています。また、近くには丹後国分寺や国分尼寺があったものと推測されています。

雪舟が1501年から1506年の間に描いたと言われる『天橋立図』に、この地の情景が描かれています。南東から北西方向に天橋立と阿蘇海を鳥瞰したもので、画面の中段、ほぼ水平に天の橋立が描かれ、右手奥に成相(なりあい)寺、その麓に丹後一の宮である籠(この)神社、中央左方である天橋立の東側には智恩(ちおん)寺が描かれています。府中地区の狭い平野には海岸に沿って家々が密集しており、その間に街道と松並木が描かれています。

近年、雪舟の『天橋立図』に描かれた情景を彷彿とさせる考古資料が発見されています。

現在の国道178号線と平行して、16世紀中頃の溝や数条の柵列が検出されました。溝の南側の地面は固く締まっており、道路面とその側溝と判断されました。柱列は籠神社を取り囲む柵列と思われます。溝からは多量の松毬(まつかさ)が出土しました。周辺に松林が所在していたことを示しています。

天橋立と丹後国府中地区（北東から）

また、籠神社の鳥居の下からは、直径0.8mと0.9mの木柱の残欠が発見されました。鎌倉時代頃の古い鳥居の柱と推定されています。

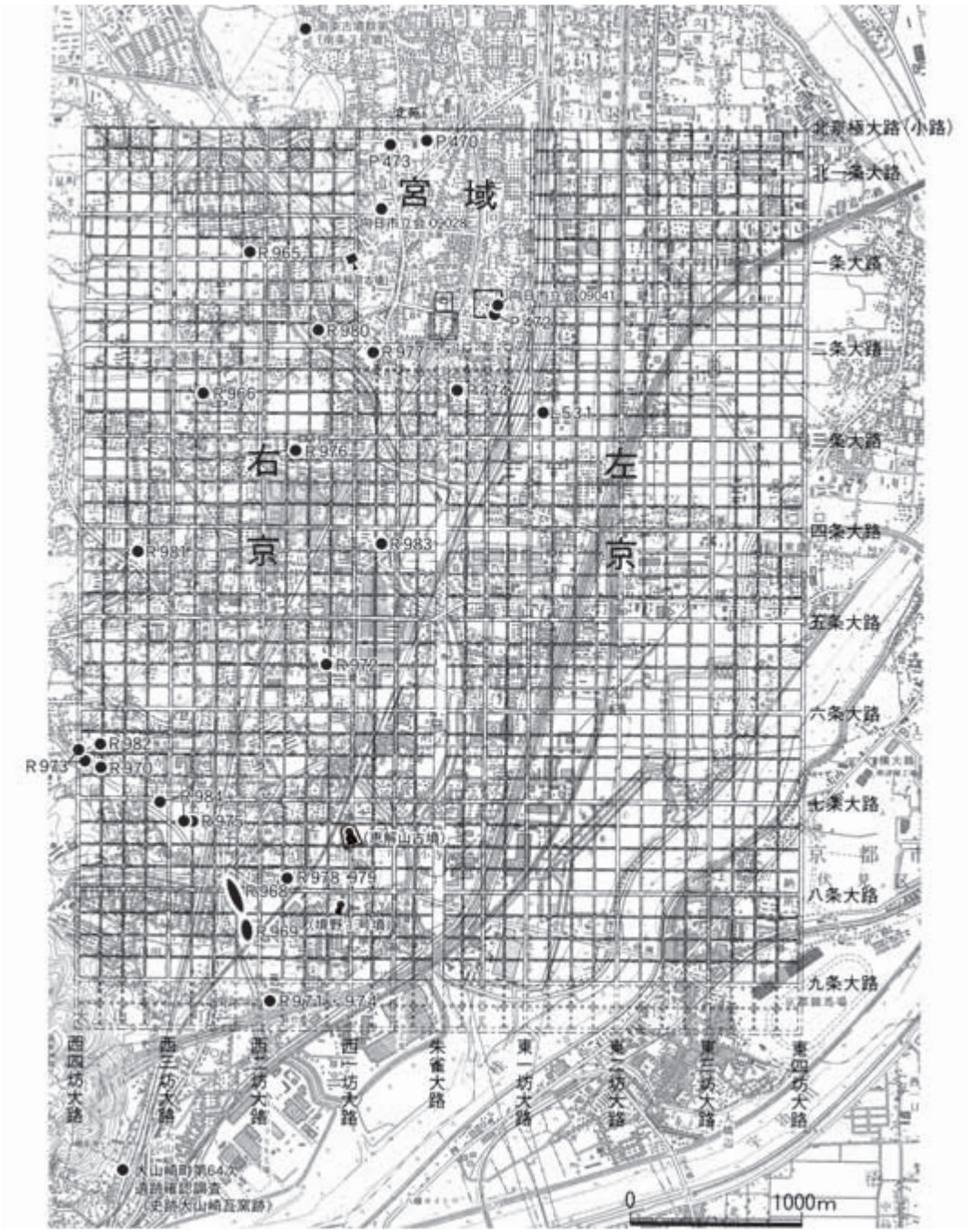
籠神社の東、真名井川の東側では、平安時代後期～鎌倉時代の井戸跡や柱根などが多数検出されました。ここでは、輸入陶磁器や木製品とともに漆絵漆器椀が多量に出土しました。輸入陶磁器や漆器類は当時の高級食器類と考えられます。

籠神社を囲む柵と溝

これらの考古資料は200年前後の時間幅があり、厳密には、雪舟の『天橋立図』に描かれた情景とは異なりますが、籠神社を中心にして、中世の丹後国府中の賑わいを窺わせるものです。　（石尾政信）

長岡京跡調査だより・106

長岡京跡発掘調査の情報交換及び資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月１回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成21年５月から９月には、29件の調査報告があった。そのなかで、重要な成果が得



調査地位置図（１/40,000）
（向日市文化財事務所・（財）向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図に加筆）
調査地はＰが宮域、Ｒが右京域、Ｌが左京域を示し、数字は次数を示す。

られたものについて報告する。

宮域　宮跡第470次調査・第473次調査(向日市寺戸町)では、朝堂院中軸線より西側の宮内で初めて北一条条間南小路の北側溝が見つかった。宮跡第472次調査(向日市鶏冠井町)では、長岡宮第二次内裏(「東宮」)の東南部で、東脇殿の身舎の柱列と内裏南面築地回廊の雨落溝が発見された。脇殿は東西棟の掘立柱建物で、その東端にあたる桁行(東西)３間以上、梁間(南北)２間分が確認された。凝灰岩切石の縁石外装をもった基壇を備え、基壇の出は柱心から東へ約2.1m(７尺)、南側へ約2.4m(８尺)だった。柱掘形は一辺1.2m四方、柱間寸法は桁行・梁間共に10尺(3.0m)等間を測る。殿舎配置は、正殿の南方が開く「コ」字形を指向すると考えられる。

左京域　左京第531次調査(向日市鶏冠井町)では、官司の厨房施設が想定されている三条三坊三町の南端において、三条条間南小路の側溝と、掘立柱建物跡等が検出された。遺物として、銭貨、木簡、墨書土器などが出土した。

右京域　右京第965次調査(京都市西京区大原野)では、長岡京に関連する遺構の下面で縄文～弥生時代の集落遺構が検出された(上里遺跡)。弥生時代前期の遺構として竪穴式住居跡３基以上、土器棺墓１のほか、炉跡と見られる焼土、多数の柱穴が検出された。乙訓地域では初めての弥生時代前期の住居遺構となる。下層では、縄文時代晩期(滋賀里Ⅱ～Ⅲ式)の遺物(土器・石器)・炭化物を包含する遺構が検出された。石核を含む多量のサヌカイトチップが集積する土坑があり、集落内での石器製作が想定できる。右京第971・974次調査(大山崎町円明寺)では、小泉川下流域に展開する古墳時代後期の集落の一画を確認した。方形の竪穴式住居跡が、周壁の一辺を揃えて東西に並ぶ状況で検出された。一辺6.9mを測る規模の大きな住居は、完形の土器類や放射状に倒れ込んだ炭化木材が出土したことから、焼失したものとみられる。右京第968次調査(長岡京市調子)では、平安時代中～後期の遺物を出土する溝群が、またこれに南接する右京第969次調査(長岡京市調子)では、弥生時代中期の土坑、古墳時代後期の竪穴式住居跡、平安時代末の石組み井戸・池状遺構などが検出された。右京第970次調査(長岡京市下海印寺)では、古墳時代前期および後期の竪穴式住居跡、長岡京期の祭祀関連遺物(土馬・ミニチュア竈等)が出土する溝、中世の堀が検出された。堀は幅約５mを測り、これを横断する土橋が後補されている。

京域外　史跡大山崎瓦窯跡の調査では、昨年度の史跡の北側で検出された７号窯のさらに６m北側から、新たに８号窯が検出された。８号窯は、６m間隔で５基が並ぶ２～６号窯と同一直線上にあり、さらに７号窯が６号窯の48m北に位置する。計画性の非常に高い、大規模な瓦工房であることが改めて確認された。南条古墳群第５次調査(向日市物集女町)では、直径25mの３号墳の主体部の調査が実施された。調査では、3.7×2.4mの墓壙を確認したが、木棺の構造を解明するには至らなかった。出土した水晶製勾玉・鉄製刀子・各種埴輪類(Ⅳ期)・須恵器から、５世紀中頃に比定された。

(伊賀高弘)

普及啓発事業（７月～10月）

当調査研究センターは、京都府内で国や府等が行う公共事業により消滅する埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくために、発掘調査現地説明会・埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業等の普及啓発活動を行っています。

小さな展覧会

京都府内において平成20年度に実施された発掘調査成果速報展・第25回小さな展覧会を平成21年８月14日（金）から８月30日（日）までの間、向日市文化資料館２階研修室及びラウンジで開催しました。与謝野町温江（あつえ）遺跡から出土した弥生時代前期の人面付き土器、木津川市鹿背山（かせやま）瓦窯跡からは粘土を運ぶためにわらで編んだ「もっこ」など、新聞紙上等で話題となった23遺跡を取り上げ、出土遺物や写真パネルで時代順にわかり易く展示するよう心がけました。

また、「乙訓地域の縄文集落」、「木津川市馬場南遺跡と周辺遺跡」と題して、小企画展示を行いました。近年、石囲い炉を持つ住居跡や火葬骨を埋葬した墓壙など、乙訓地域での縄文時代遺跡の調査が増加し、縄文社会の様子が徐々に明らかになってきました。展示では、縄文社会の衣・食に焦点を当て山と川の風景を再現するとともに、乙訓地域で出土した縄文土器や石器、石囲い炉の復元模型、遺跡の写真展示などわかり易く配置しました。

全国で３例目となる万葉歌木簡が出土した馬場南遺跡のコーナー展示では、木簡は保存処理中のため現物展示できませんでしたが、「神雄寺」、「大殿」などと書かれた墨書土器、三彩陶器や山水が表現された彩釉陶器、ガラス管、多量に出土した灯明皿など、古代寺院跡としては特異な出土遺物をところ狭しと展示しました。

「小さな展覧会」での縄文のイメージ展示

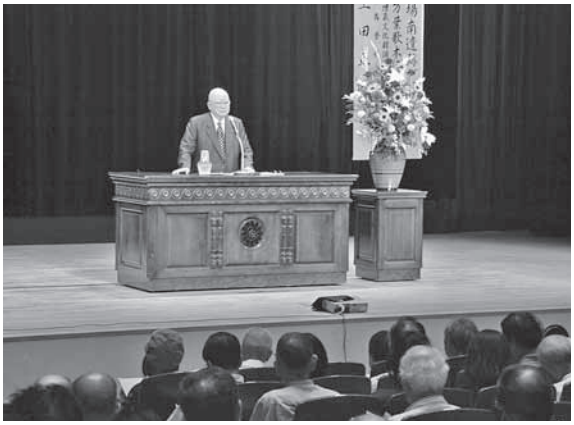
約２週間の開催期間ではありましたが、東は千葉・東京から西は福岡・鹿児島まで遠方の方々にも見学していただき、総入館者数は1,344名を数えました。今回の展示では、万葉の世界に惹かれた考古学ファンの来館者が多かったように見受けられました。

埋蔵文化財セミナー

第114回埋蔵文化財セミナーを平成21年８月15日（土）に向日市民会館で開催いたしました。今回のテーマは、「馬場南遺跡が語るもの－神雄寺と万葉歌木簡－」と題して実施しました。万葉歌木簡が出土した木津川市馬場南遺跡について、現地調査を担当した伊野近富次席総括調査員から遺跡の紹介とその重要性について問題提議がなされた後、上田正昭理事長から神仏習合寺院としての神雄（尾）寺と万葉歌木簡の意義に

ついてご講演をいただきました。

その後、馬場南遺跡が提示する問題についてシンポジウムを開催しました。シンポジウムの前半では、奈良大学の上野誠教授から「万葉木簡と万葉集研究」、上原真人理事から「神雄寺と古代仏教－三彩『山水陶器』の謎を解く」の基調報告をいただきました。



第 114 回埋蔵文化財セミナー
上田正昭理事長の特別講演

後半では、井上満郎理事に司会をしていただき、上田理事長、上原真人理事、上野誠教授、調査担当の伊野次席総括調査員がパネラーとして参加し、白熱したシンポジウムとなりました。上野教授からは、寺院跡から出土した歌木簡をどう考えるのか、仏教儀礼と和歌の場の関係についての意見が伺えました。上原理事からは、三彩「山水陶器」やガラス管等の特異な遺物は、灌仏会の調度具と考えられるとの考えが提示されました。上田理事長は、神雄寺は時の権力者である橘氏と関係が深いのではないかと話され、聖武天皇を取り巻く貴族達の表舞台の一コマを想起することができました。万葉歌木簡の裏面に「越中守」（８世紀中葉に越中守に在任していたのは、万葉集と関係が深い大伴家持）とも読める墨書が赤外線で確認されたことも話題となりました。お盆の最中の開催ではありましたが、参加者はホールがほぼ満席となる 353 名を数え、盛況裏に終えることができました。

第 114 回埋蔵文化財セミナー
シンポジウム

「遺跡に学ぶ」考古学講座

平成 20 年度から全国埋蔵文化財法人連絡協議会の近畿地区の法人が中心となり 10 月 10 日を「関西考古学の日」と銘打って、その前後の９月から 11 月の３ヶ月間、各組織で各種イベント等を開催し、各地域の遺跡に親しんでいただく企画を行っています。センターではこの間、計４回の考古学講座を開催することとし、９月 19 日、10 月 17 日の土曜日、午前 10 時 30 分から正午までセンター研修室で、第１・２回の講座を開催しました。第１回の講座では、南山城地域の古墳時代史「相楽郡精華町鞍岡山古墳群の意味するところ」と題して小池寛課長補佐から、第２講座は、「弥生人の顔を探る－与謝郡与謝

関西考古学の日　考古学講座

野町温江遺跡の人面付土器からみた弥生風俗」と題して岩松保資料係長から、プレゼンテーション・ソフトを駆使し、できるだけ詳しく、わかり易く、楽しく講義を行いました。また、会場では関連する遺物や写真パネルの展示も行い、参加者の関心を集めていました。

現地説明会

亀岡市蔵垣内（くらがいち）遺跡は、丹波国分寺が造られた丘陵の東側に広がる、弥生時代から中世の集落跡として知られた遺跡です。今回、弥生時代後期の竪穴式住居跡１基と６世紀後半の古墳２基を検出しました。８月１日（土）に現地説明会を行い、60名の方々に見学していただきました。

京都第二外環状道路関係遺跡現地説明会

京都第二外環状道路建設に伴う長岡京跡・下海印寺遺跡の調査では、土馬やミニチュア土器が溝から出土し、長岡京の西南隅で行われた祭祀遺構として大きく報道されました。８月29日（土）に現地説明会が開催され、小雨降る中、兵庫県や大阪市、京都府内各所から98名の方々に参加いただきました。

南丹市大谷口（おおたにぐち）遺跡は弥生時代中期から鎌倉時代にかけての集落遺跡として知られています。今回の調査では、縄文時代晩期の土坑や古墳時代中期の造り付けの竈を持つ竪穴式住居跡が検出されました。造り付け竈は、当時の最先端技術が早くから丹波地域に導入されたことを裏付けるものとして話題となりました。９月19日（土）に現地説明会を開催し、51名の方々に参加していただきました。

清水寺境内馬駐（うまとどめ）跡の調査は、明治30年に約10ｍ北側に移動される以前にあった位置を調査したものです。馬駐は、仁王門の前面北側にあり、清水寺参詣者の馬を一時的に仮繋ぎする建物です。現在の馬駐は、文明元（1469）年に焼失し、室町時代後期には再建されました。現存する最古の馬駐で、重要文化財に指定されています。今回の調査は、解体修理に伴い、明治30年以前の建物構造を確認するために実施しました。調査では、江戸時代頃に掘られたとみられる20基ほどの小土坑を検出し、礎石を設置するための地固め痕跡と考えられました。調査地は清水寺門前で多くの人々が参詣する場所であるため、現地説明会を実施せず、９月26日（土）の10時から15時までの時間を定め、解体修理の現況公開と併せて発掘調査地の現地公開を行いました。新聞記事を見て来られた方や参詣者、修学旅行生など、約250名の方々に随時発掘調査地の説明を行いました。

清水寺馬駐跡発掘調査地現地公開

（水谷壽克）

センターの動向

（平成21年7月～平成21年10月）

月	日	事　　項
7	3	長岡宮跡第473次・南垣内遺跡（向日市）発掘調査開始
	6	深志野古墳群（京丹波町）発掘調査終了（5／8～）
	9	女谷・荒坂横穴群（八幡市）発掘調査開始
	10	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議（於：奈良市）　肥後弘幸調査第１・２課長、小池寛調査第２課課長補佐出席
	14	人権大学講座（於：京都市）森正調査第２係長出席
	16	乙訓総合庁舎人権研修（於：向日市）肥後弘幸調査第１・２課長、小池寛調査第２課課長補佐出席
	17	職員研修「共同研究－弥生時代における地域色の発現－」講師；高野陽子調査員
	21	片山遺跡・下馬遺跡（精華町）発掘調査開始
	22	安全パトロール（乙訓地域１－長岡京跡・松田遺跡－） 長岡京連絡協議会（於：当センター）
	23	安全パトロール（乙訓地域２－長岡京跡・下海印寺遺跡ほか－）
	28	長岡宮跡第473次・南垣内遺跡（向日市）発掘調査終了（7／3～）
	31	長岡京跡右京第974次・松田遺跡（大山崎町）発掘調査終了（6／1～） 職場研修「馬場南遺跡について」講師；伊野近富次席総括調査員 中世城館跡調査委員会（於：京都市）小山雅人総括調査員出席
8	1	蔵垣内遺跡（亀岡市）現地説明会（参加者60名）
	3	京都府職員研修（於：京都市）松尾史子調査員受講 丁谷古墓（京丹波町）発掘調査開始
	14	第25回小さな展覧会開催（於：向日市文化資料館）（～8/30）
	15	第114回埋蔵文化財セミナー（於：向日市民会館、参加者353名）
	19	理事協議会（於：当センター）
	21	仲ノ段遺跡（福知山市）地元説明会（参加者16名）
	26	長岡京連絡協議会（於：当センター） 川村智文化財保護課長大谷口遺跡（南丹市）現地視察
	27	人権研修指導者養成研修会（於：京都市）水谷壽克調査第１課主幹、小池寛調査第２課課長補佐受講 教育庁人権研修（於：京都市）小山雅人総括調査員、杉江昌乃総務係長受講
	28	市町記念物保護行政担当者会議（於：京都市）岩松保資料係長、筒井崇史調査員出席 仲ノ段遺跡発掘調査終了（6/23～）
	29	長岡京跡右京第970次・下海印寺遺跡（長岡京市）現地説明会（参加者98名）
	30	小さな展覧会終了（1,344名入館）
9	2	人権大学講座（於：京都市）水谷壽克調査第１課主幹受講
	3	平成21年度埋蔵文化財担当者等講習会（於：大阪市）肥後弘幸調査第１・２課長、小池寛調査第２課課長補佐、伊賀高弘主査調査員、筒井崇史調査員出席（～9／4）

7　清水寺馬駐跡(京都市)発掘調査開始
8　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター中期経営目標等検討会議(於：京都市)
14　職員研修「講習会報告」講師；伊賀高弘主査調査員、筒井崇史調査員
16　長岡京連絡協議会(於：当センター)
　人権大学講座(於：京都市)石井清司調査第２課主幹受講
17　AED講習(於:向日町消防署)安田正人副局長、杉江昌乃総務係長、柴暁彦主査調査員、村田和弘調査員受講
　丁谷古墓(京丹波町)発掘調査終了(８/３～)
　人権教育担当者研修会(於：亀岡市)安田正人副局長受講
19　考古学講座「遺跡に学ぶ」Ⅰ　講師；小池寛調査第２課課長補佐
　大谷口遺跡(南丹市)現地説明会(参加者51名)
26　清水寺馬駐跡(京都市)現地公開(参加者約250名)
28　清水寺馬駐跡(京都市)発掘調査終了(９/７～)
29　大山崎町ふるさと案内人養成講座　中川和哉主任調査員派遣
10　7　大谷口遺跡(南丹市)発掘調査終了(～５/18)
13　人権大学講座(於：京都市) 肥後弘幸調査第１・２課長、小山雅人総括調査員受講
14　新田遺跡(八幡市)発掘調査開始
17　考古学講座「遺跡に学ぶ」Ⅱ　講師；岩松保資料係長
20　人権大学講座(於：京都市)杉江昌乃総務係長受講
　上里遺跡(長岡京市)発掘調査開始
27　人権大学講座(於：京都市)岩松保資料係長受講
　上狛北遺跡(木津川市)発掘調査開始
28　長岡京連絡協議会(於：当センター)
　椿井遺跡(木津川市)発掘調査開始

編集後記

情報 110 号が完成しました。

本号では、綾部市教育委員会が調査を実施した久田山古墳群の調査成果を現地調査を担当した三好さんから玉稿をいただきました。また、共同研究報告では、当調査研究センター職員の地道な研究成果を掲載しています。遺跡でたどる京都の歴史では、中世社会の中の様々な局面を発掘調査の成果から浮かび上がらせています。

（編集担当　Ｉ．Ｔ）

京都府埋蔵文化財情報　第110号
平成 21 年 11 月 30 日
発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒 617-0002　向日市寺戸町南垣内 40 番の３
Tel　(075)933-3877（代）　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒 604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961（代）　Fax (075)231-7141

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER